

第11回 東夷伝(7) 倭人1. 暮らし



I. はじめに

倭人伝の収録

II. 倭人伝の暮らしに関連する記事を読む

III. 倭人伝の暮らしに関連する記事の考古学的アプローチ

IV. おわりに

今後の課題

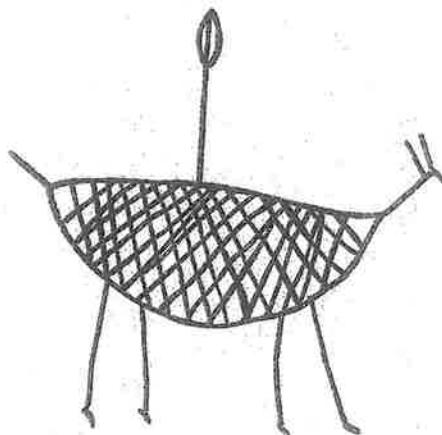
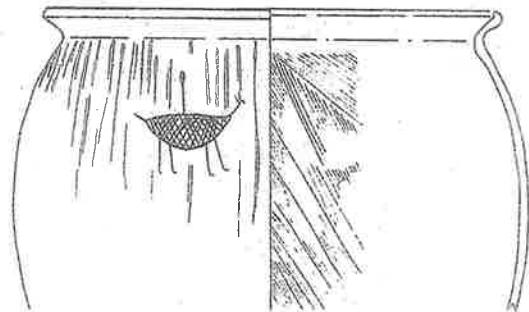


図4 矢が刺さった鹿
(滋賀県立安土城考古博物館, 1994「弥生の祈り人」より)

場が開かれ、それぞれの地方の物産の交易が行なわれて、大倭が命ぜられてその監督の任に当っている。女王國より北の地域には、特別に一大率いちだいそつの官が置かれて、國々を監視し、國々はそれを畏れている。一大率はいつも伊都國にその役所を置き、國々の間でちょうど中国の刺史ししのような権威を持つていて、倭王が京都みやこや帶方郡や韓の國々へ使者をおくる場合、あるいは逆に帶方郡からの使者が倭に遣わされるときには、いつも港で荷物を広げて数目を調べ、送られる文書や賜わり物が、女王のもとに着いたとき、まちがいがないようにと点検をする。下戸の者が道で大人に会うと、後ずさりをして草の中に入り、言葉を伝えたり説明したりするときには、うすくまつたりひざまずいたりして、両手を地につき、大人に対する恭敬を表わす。答えるときには「噫あい」といい、中国で承知しましたというのとよく似ている。

「一」『魏略』にいう。彼らの間では正月を年の初めとすることや四つの季節の区別は知られておらず、ただ春の耕作と秋の収穫を日やすにして年を数えている。

その国では、もともと男子が王位についていたが、そうした状態が七、八十年もつづいたあと、「漢の靈帝の光和年間に」倭の國々に戦乱がおこって、多年にわたり互いの戦闘が続いた。そこで國々は共同して一人の女子を王に立てた。その者は卑弥呼ひみこと呼ばれ、鬼神崇拜の祭祀者として、人々の心をつかんだ。彼女はかなりの年齢になつても、夫はなく、その弟が国の統治を輔佐はさした。王位に即いて以来、彼女に目通りした者はほとんどない。千人の侍女を自分のまわりに侍らせ、男子がただ一人だけいて、飲食物を運んだり、命令や言上の言葉を取り継いでいた。起居するのは宮室や樓觀たかどのの中で、まわりには城壁や柵が厳しくめぐらされ、兵器を持った者が四六時中、警護に当つた。

うが、その様子は中国で行なう練沐れんもくとよく似ている。倭の者が海を渡つて中国と往来すると
きには、いつも一人の者をえらんで、頭もくしけずらず、しらみも取らず、衣服は汚れたま
まで、肉を食べず、婦人も近づけず、喪中の人のようにさせる。これを持衰じさいと呼ぶ。もしそ
の旅が無事であれば、皆でその者に家畜や財物を与える。もし病氣が出たり、思いがけない
災害にあつたりすれば、人々はその者を殺そうとする。彼の持衰が充分に慎み深くなかった
から「そうした事が起つたのだ」というのである。

その土地は、真珠や青玉を産出する。山地には丹たんを産し、木材として楠・杼・予樟・櫟
櫻・投檣・鳥号・楓香などを産し、竹には篠簾しのだけ・桃枝竹とうしちくがある。畫・橘・椒・薑荷などが生
えるが、それらが美味であることを知らない。獮猴や黒雉くろきじがいる。

その地の風習として、なにか事を起したり旅行をするなど、特別なことをするときには、
必ず骨を焼いてトし、吉凶よきを占う。龜トに先だって占う内容を告げるが、そのときの言葉は
中国の命龜めいき（トに先だって占いの内容を龜甲に告げる）の法と同じで、焼いてできた割れ目を
見て吉凶の兆を判断する。彼らの会合の場での立居振舞いには、父子や男女の区別がない。
人々は生れつき酒が好きである。大人や敬うべき人物に会つたときにも、ひざまずいて拝す
る代りに拍手をするだけである。人々は長生きをし、百歳だと八、九十歳の者もいる。風
習として、国々の大人たちは四、五人の妻を持ち、下戸でも二、三人の妻を持つ者がある。
婦人たちは身もちがしつかりとし、嫉妬することもない。盜みをせず、訴訟ごそうざたは少ない。
法を犯す者がいると、軽い場合にはその妻子を没収し、重い場合には一門全体が根絶やしに
される。宗族間の関係や尊卑については、それぞれ序列があつて、上の者のいいつけはよく
守られる。租税や賦役の徵收が行なわれ、その租税を収める倉庫が置かれている。国々に市

〔倭人たちは〕男子は、誰もかれもが、顔や身体に入れ墨をしている。昔から、倭の使者が中国にやつてくるときには、みな自分のことを大夫と称している。夏王朝の主君であつた少康の息子は、会稽に封ぜられると、髪を切り身体に入れ墨をして、蛟や龍の害を避けた。いま倭の水人たちは盛んに水に潜つて魚や蛤を捕つてゐるが、身体に入れ墨をするのは同様に大きな魚や水禽を追いはらうためであつて、それが後にだんだん飾りとなつたのである。国ごとに入れ墨がそれぞれ異なり、あるいは左がわ、あるいは右がわ、あるいは大きく、あるいは小さくて、尊卑による区別がある。倭までの道のりを計つてみると、会稽や東冶の東方に位置するのであろう。

その風俗は淫乱を知らない。男子は冠をつけず、木綿で頭をしばつて髪まげを作る。その着物は横に幅広いきれをただ結び合わせるだけで、縫い合わせたりすることはほとんどない。女子は、ざんばら髪で「その一部をたばねて」まがつた髪を結い（？）、着物をしたてるといつても单被ひとえ（シーツ？）のようなもので、その中央に穴をあけ、その穴に首を通して着るだけである。禾稻や紵麻を植え、蚕をかつてそれを糸に紡ぎ、目の細かい紵ちよ（麻布）や縑かとりきぬ縑縣かとりきぬを産出する。その土地には、牛・馬・虎・豹・羊・鶴かさきはいな。兵器として、矛・楯・木弓を用いる。木弓は下しもが短く、上うへが長く、竹の箭に鉄製の鏃やざりをつけたり骨製の鏃やざりをつけたりする。この地の產物は、儋耳や朱崖と同じである。倭の土地は温暖で、冬夏にかかわらず生野菜を食べ、誰もがはだしである。ちゃんとした家に住み、父母兄弟で寝間や居間を異にしている。朱や丹をその身体に塗るが、それはちょうど中國で白粉おしらを用いるのと同様である。飲食には籠豆へんとう（たかつき）を用い、手づかみで食べる。死ぬと、棺に収められるが櫛かくはなく、土をつんで冢つかを作る。死ぬとすぐ十日余りのもがりをし、その間は肉を食べず、喪主は哭泣こくぎゆうし、ほかの者はそのそばで歌舞し酒を飲む。埋葬が終ると、家じゅうの者が水中に入つて身体を洗

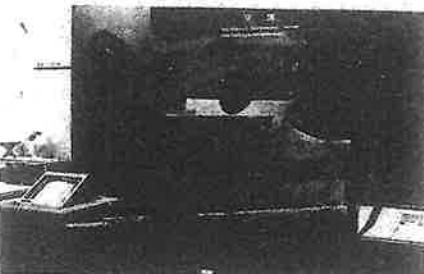
「魏志」倭人伝に記された 倭の国々と政治・外交・風俗

弥生時代の春の水田

弥生時代の秋の水田

◎邪馬台国の集落

弥生時代の人々は、共同で水田を耕していた。秋になると稻を刈り取り、米の乾燥や脱穀などを行った。また収穫した作物は高床式倉庫に保管していた。所蔵・写真提供／大阪府立弥生文化博物館



◎久宝寺遺跡出土船(復元)

久宝寺遺跡(大阪府)から出土した古代船の先端部分を復元したもの。所蔵／大阪府文化財センター、写真提供／大阪府立弥生文化博物館



◎福吉角田遺跡出土絵画土器

鳥取県米子市にある福吉角田遺跡から出土した土器。左に描かれた絵は「高床式建物」、右は「やぐら状建物」とされるが、左を「壁立ち住居(壁穴住居の構造に壁が取りつくもの)」、右を「高床式建物」とみる解説もある。写真提供／米子市教育委員会

「倭人伝」の記述が多いのは
司馬懿の功績を称えるため!?

まで続く邪馬台国所在地論争の原因
の大元になっている。

3世紀末に完成した『魏志』倭人
伝は、おおよそ3つの内容に分けるこ
とができる。

◎倭の國々の道のり
朝鮮半島の中部にある帶方郡を出
発し、邪馬台国に至るまでのルートが
記されている。邪馬台国に着くまでに
7つの服属国（対馬国、一支国、末盧
国、伊都国、奴国、不弥國、投馬國）
を通過するが、それらの国々の官職名
や戸数も記されている。また卑弥呼に
に服属する21の国が列記されているほ
か、対立する狗奴国に関する記述も
ある。

邪馬台国までの道のりには距離や
方位も記されているが、その記述には
いくつもの矛盾がある。これが、今日
に至る朝貢とこれに対する魏の応対ぶり
に服属する21の国が列記されているほ
か、対立する狗奴国に関する記述も
ある。

◎倭國の儀禮と外交
景初3年(239)から正始8年
(247)までの、倭國の4度にわた
る朝貢とこれに対する魏の応対ぶり
が記されている。

また女王・卑弥呼についても記載さ
れており、女王になつてから倭國の争
乱が収まつたこと、「鬼道」に仕えた
こと、卑弥呼が死んだあととの様子も
記している。

入れ墨(黥面・文身)、髪型、衣
服、織物、動植物、武器、食事、葬
儀、占い、寿命、婚姻、持表(航海
の安全を祈る者)といった倭國の風俗。
地誌のほか、統治機構や刑罰、租税、
身分の差など政治体制について記載さ
れている。

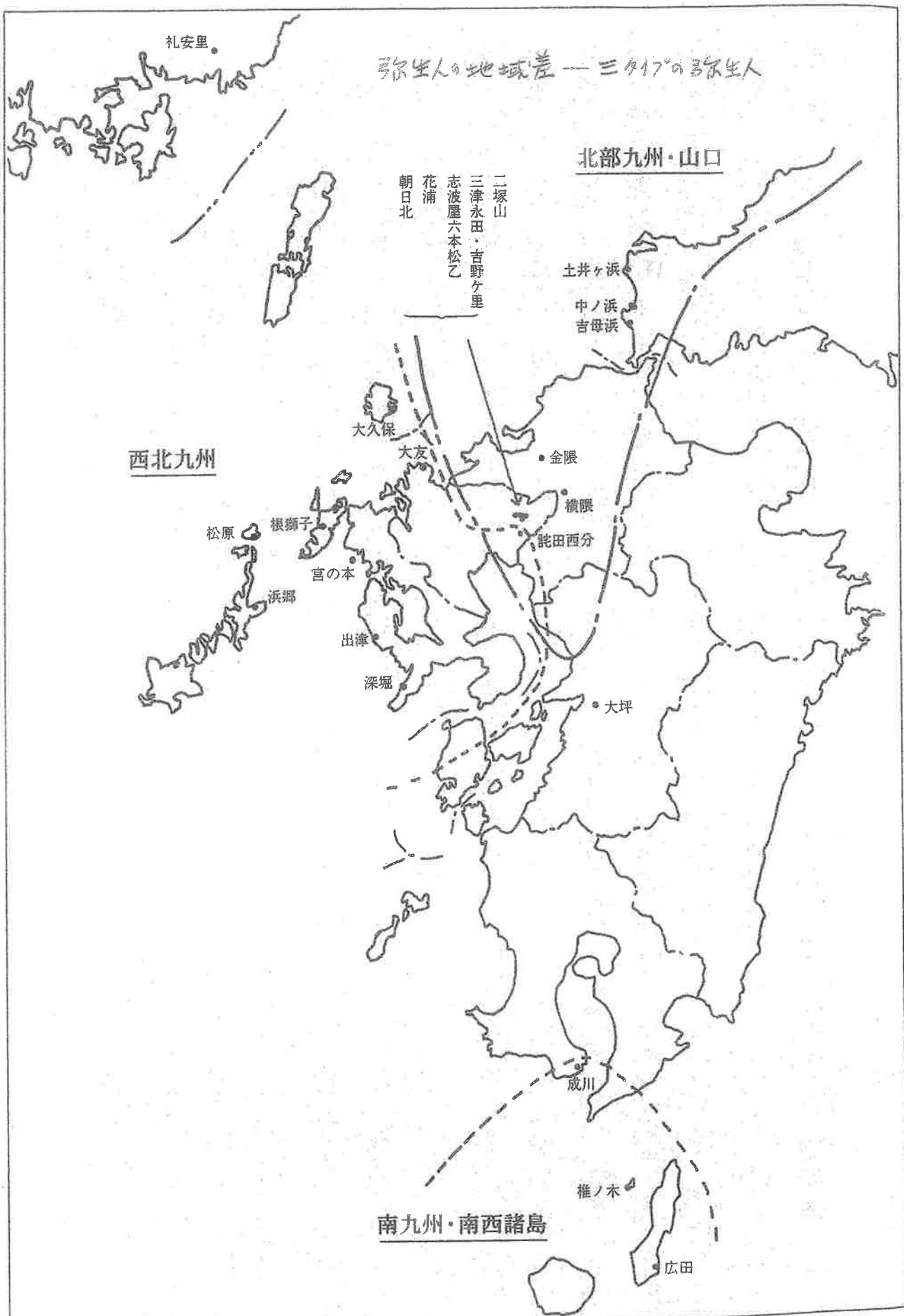
有獮猴、黑雉。其俗舉事行來，有所云爲，輒灼骨而卜，以占吉凶，先告所卜，其辭如令龜法，視火坼占兆。其會同坐起，父子男女無別，人性嗜酒。〔一〕見大人所敬，但搏手以當跪拜。其人壽考，或百年，或八九十年。其俗，國大人皆四五婦，下戶或二三婦。婦人不淫，不妬忌。不盜竊，少諍訟。其犯法，輕者沒其妻子，重者滅其門戶。及宗族尊卑，各有差序，足相臣服。收租賦。有邸閣國，國有市，交易有無，使大倭監之。自女王國以北，特置一大率，檢察諸國，諸國畏憚之。常治伊都國，於國中有如刺史。王遣使詣京都，帶方郡、諸韓國，及郡使倭國，皆臨津搜露，傳送文書賜遺之物謂女王，不得差錯。下戶與大人相逢道路，逡巡入草。傳辭說事，或蹲或跪，兩手據地，爲之恭敬。對應聲曰噫，比如然諾。

〔二〕魏略曰：其俗不知正歲四節，但計春耕秋收爲年紀。

其國本亦以男子爲王，住七八十年，倭國亂，相攻伐歷年，乃共立一女子爲王，名曰卑彌呼，事鬼道，能惑衆，年已長大，無夫婿，有男弟佐治國。自爲王以來，少有見者。以婢千人自侍，唯有男子一人給飲食，傳辭出入。居處宮室樓觀，城柵嚴設，常有人持兵守衛。

女王國東渡海千餘里，復有國，皆倭種。又有侏儒國在其南，人長三四尺，去女王四千餘里。又有裸國、黑齒國復在其東南，船行一年可至。參間倭地，絕在海中洲島之上，或絕或連，周旋可五千餘里。

男子無大小皆黥面文身。自古以來，其使詣中國，皆自稱大夫。夏后少康之子封於會稽，斷髮文身以避蛟龍之害。今倭水人好沈沒捕魚蛤，文身亦以厭大魚水禽，後稍以爲飾。諸國文身各異，或左或右，或大或小，尊卑有差。計其道里，當在會稽、東冶之東。其風俗不淫，男子皆露紱，以木縲招頭。其衣橫幅，但結束相連，略無縫。婦人被髮屈紱，作衣如單被，穿其中央，貫頭衣之。種禾稻、紵麻、蠶桑、緝績，出細紵、縑縣。其地無牛馬虎豹羊鵠。兵用矛、楯、木弓。木弓短下長上，竹箭或鐵鏃或骨鏃，所有無與儕耳、朱崖同。倭地溫暖，冬夏食生菜，皆徒跣。有屋室，父母兄弟臥息異處，以朱丹塗其身體，如中國用粉也。飲用籩豆，手食。其死，有棺無槨，封土作冢。始死停喪十餘日，當時不食肉，喪主哭泣，他人就歌舞飲酒。已葬，舉家詣水中澡浴，以如練沐。其行來渡海詣中國，恆使一人，不梳頭，不去蟻蝨，衣服垢汚，不食肉，不近婦人，如喪人，名之爲持衰。若行者吉善，共顧其生口財物；若有疾病，遭暴害，便欲殺之，謂其持衰不謹。出真珠、青玉。其山有丹，其木有楠、杼、豫樟、櫟櫧、投樞、烏號、楓香，其竹篠簜、桃支。有薑、橘、椒、蘘荷，不知以爲滋味。



土井ヶ浜遺跡 人類遺跡ミュージアム、2003年 土井ヶ浜遺跡の弥生人 改訂版



金隈弥生人（福岡県）

かねのくま



土井ヶ浜弥生人（山口県）

渡来系



広田弥生人（鹿児島県）



大友弥生人（佐賀県）

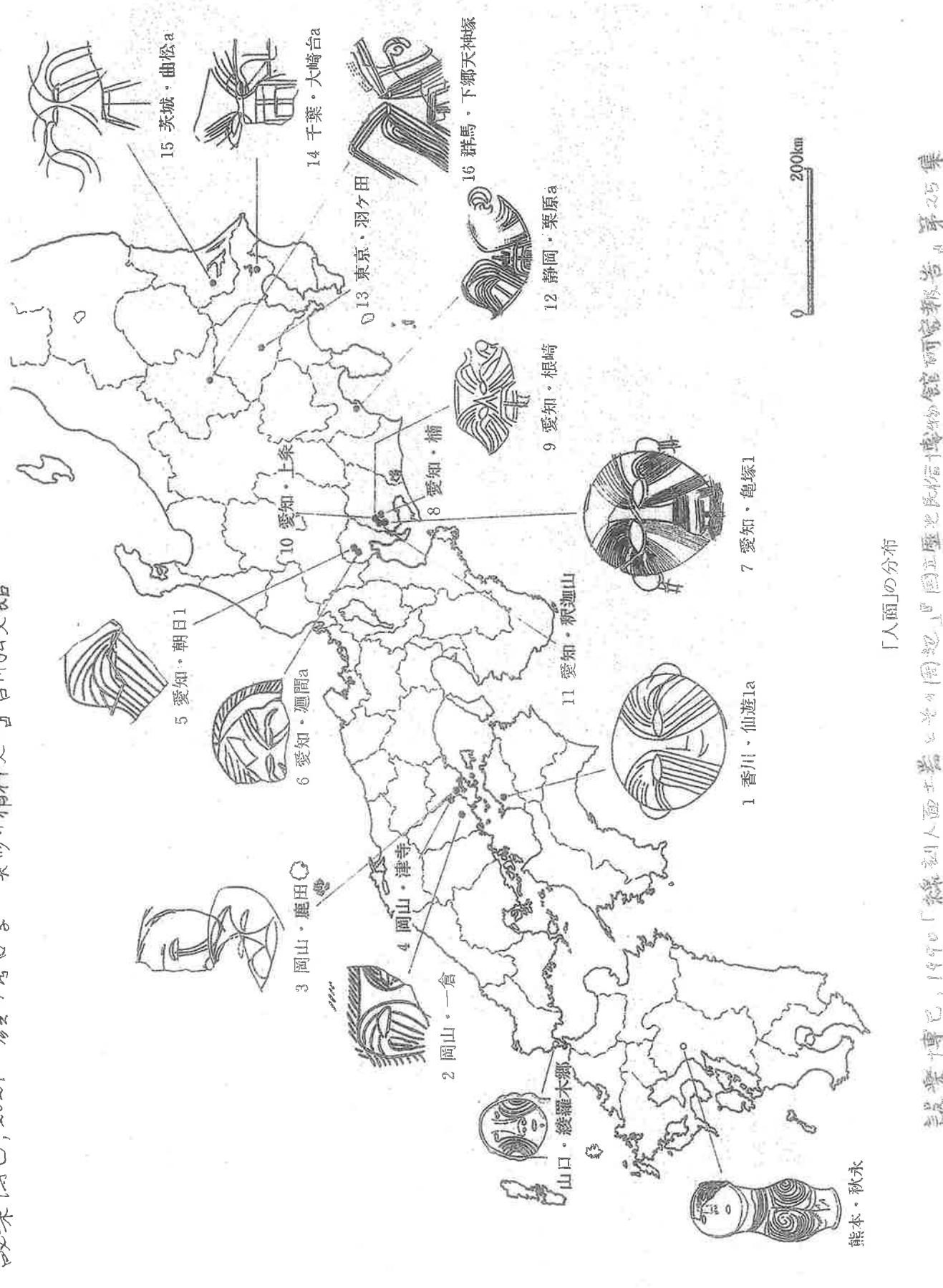
縄文系

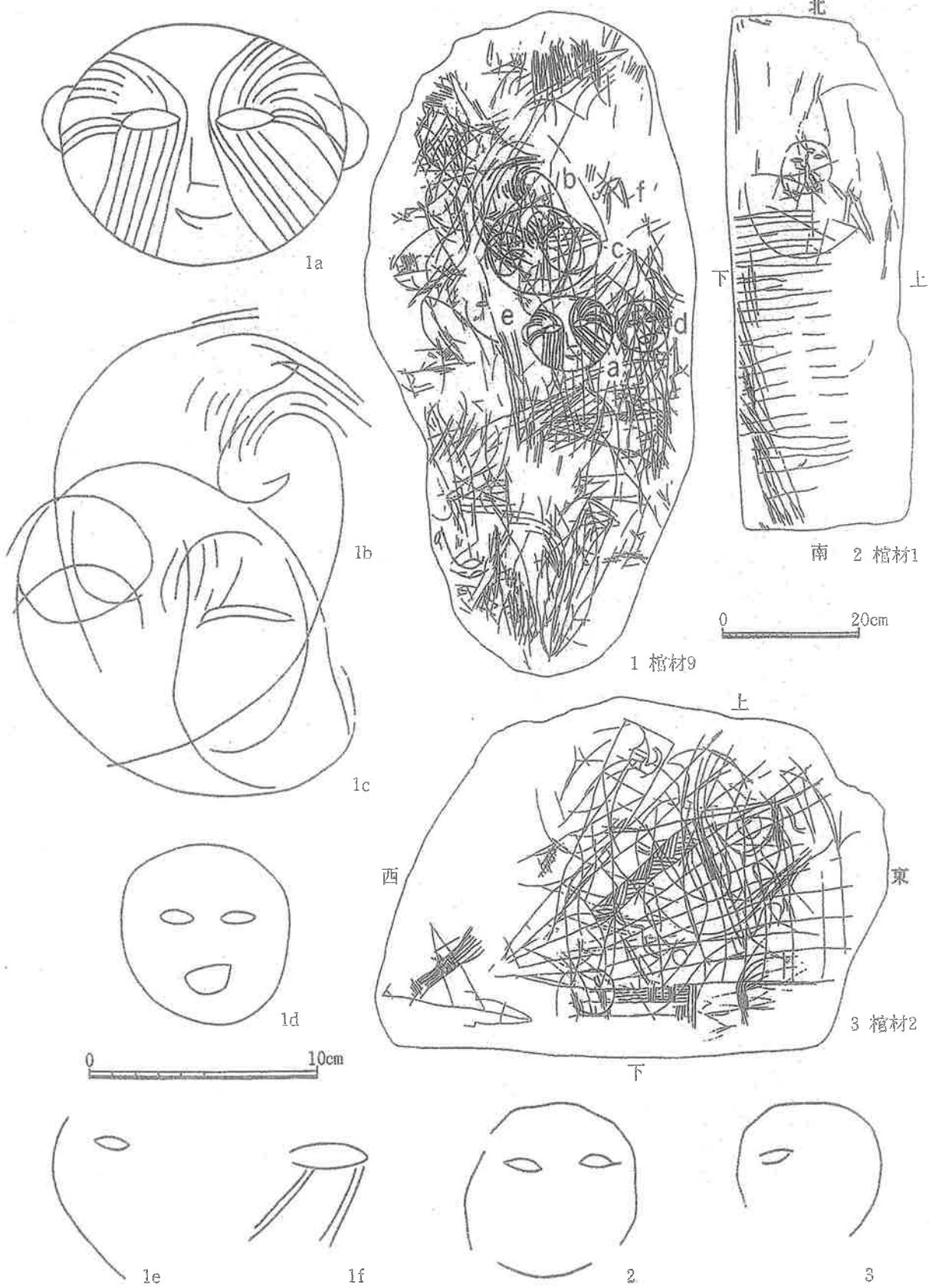
日本人の顔は昔から現代人のような容貌をしていたわけではなく、縄文時代から現代まで大きく変化してきたし、今後も進化していくはずです。各時代のうちもつともはつきりした特徴を示しているのは縄文人と中世人（鎌倉・室町時代人）です。この両時代人の特徴は一種の極限状態を示しているといつてもいいくらいです。

縄文人には時期差がみられ、早・前期人はきやしゃですが、中・後・晩期人は頑丈です。両者とも眉上弓の隆起は比較的強く、鼻骨が高く隆起し、ホリの深い容貌をしていました。四肢骨は短く、筋の付着部はよく発達しています。また、身長は一般的に低く、男性は一五八センチ、女性は一四七センチです。彼らは旧石器時代人の子孫たちと考えられます。縄文人は北は北海道から南は沖縄まで存在し、不思議なことにその形質的特徴はほぼ均質です。

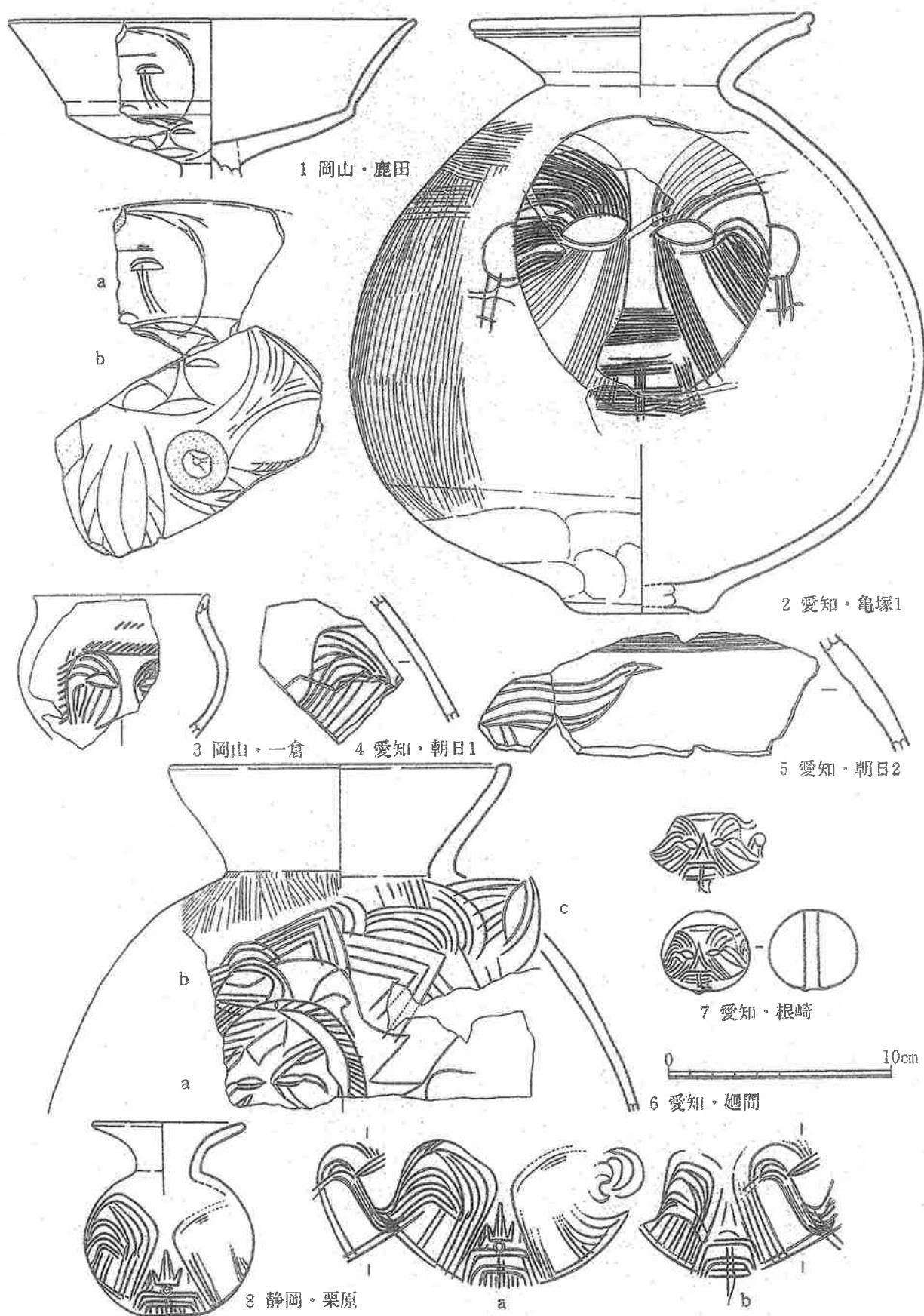
西日本地域の弥生人には地域差が認められます。縄文人的特徴を強く残す人々と縄文人の特徴が認められない人々です。後者は山口県西部地域や北部九州など地理的に大陸に近い地域で認められることから、大陸からの渡来民と推測され、前者は縄文人の子孫たちと考えられています。

吉川弘文館
『精神の歴史』一書古学形態論、2021年夏

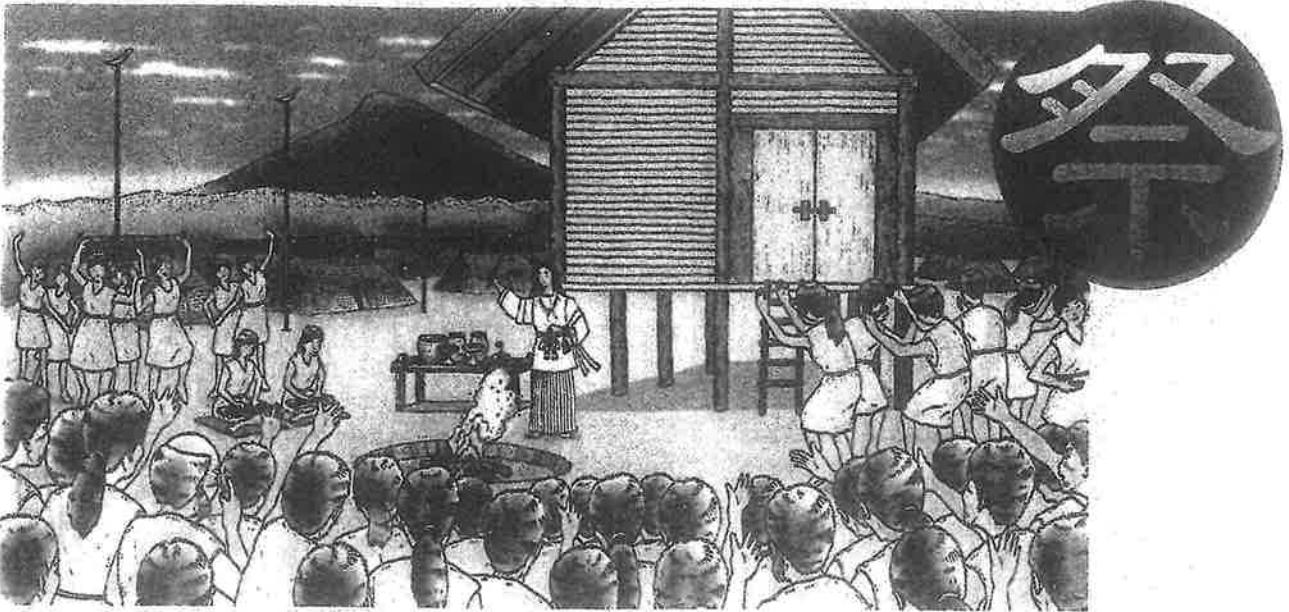




人面集成 (1)

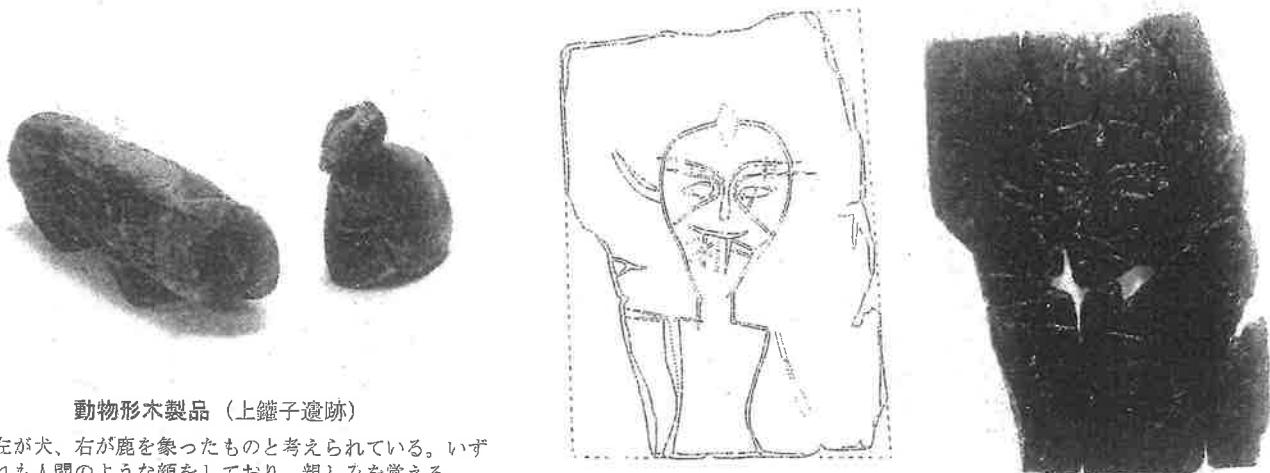


人面集成 (2)



祭りの風景

祭りの場面を想像したイラスト。司祭者を中心に、琴の演奏にあわせて人々が歌い、踊る。司祭者の横には祭壇が設けられ、丹塗土器に盛られた食物や生け贋の代わりを果たす動物形木製品が捧げられている。



動物形木製品（左罐子遺跡）

左が犬、右が鹿を象ったものと考えられている。いずれも人間のような顔をしており、親しみを覚える。

人物線刻板（上罐子遺跡）

はがきサイズの薄い板に人物の上半身が刻まれている。顔には入れ墨をし、頭には羽飾りを付け、寅頭衣のような服を着ており、右手には武器である戈のようなものをもっている。この人物は祭りを司る司祭者であった可能性がある。

祭一まつる・祈る

弥生時代の人びとは、暮らしの節目ごとにカミに祈りを捧げた。田植えや収穫などの農作業、疫病の蔓延、台風や地震などの天災、戦の勝ち負けなどに際して、占いや祭りが行われたと考えられる。

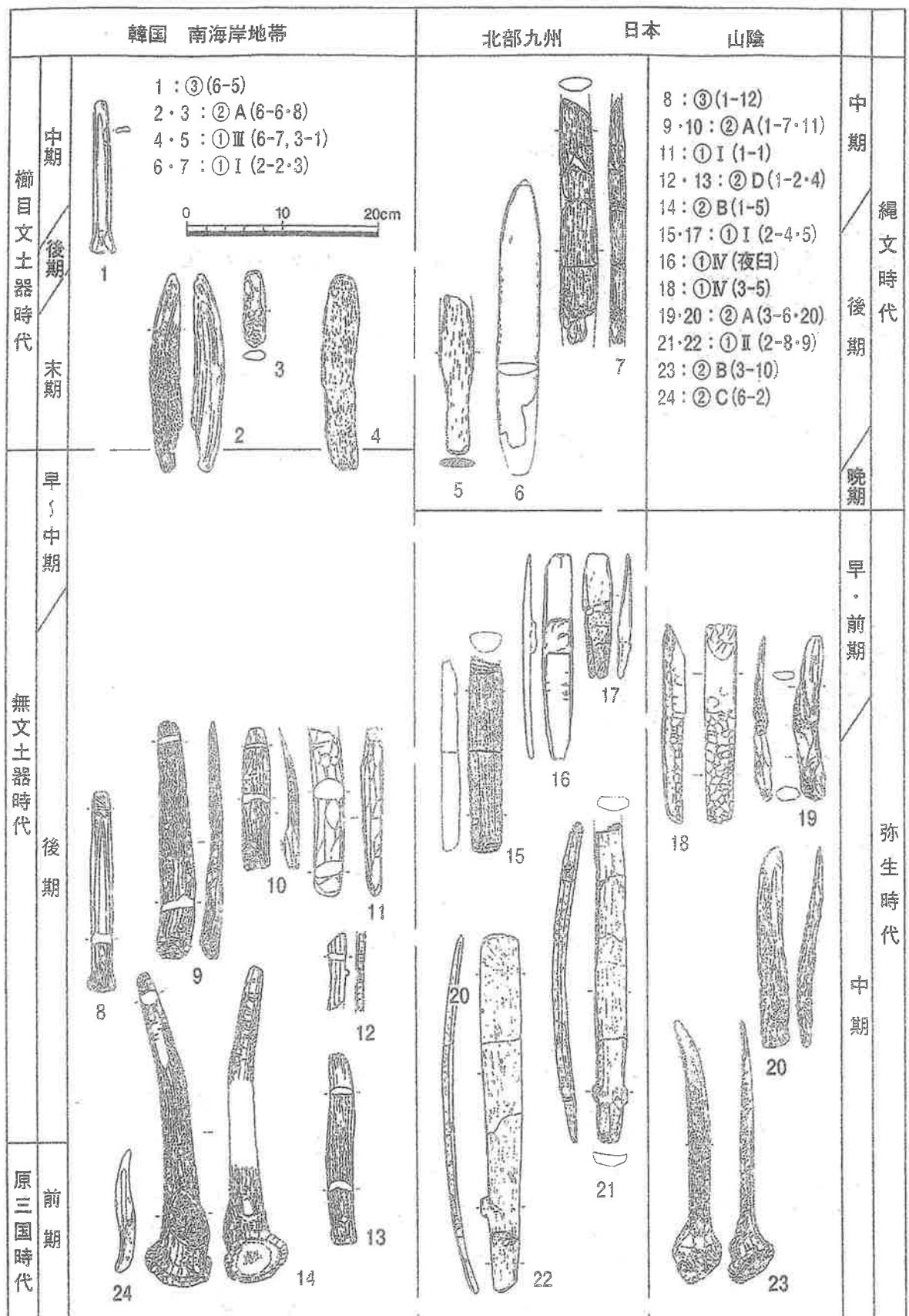
上罐子遺跡では、祭りと深く関わる遺構が発見されている。谷に突き出した方形のテラス状遺構の周りから弥生時代中期末を中心とする土器とともに、動物形や人物の描かれた板、銅鐸形土製品など祭祀に使われたとみられる遺物が数多く出土した。この谷底から湧き出る水は上罐子に暮らす人びとの喉を潤すだけではなく、ムラに繁糞をもたらす貴重な清水であったのだろう。

このテラス状遺構は水のかみをたたえる祭りが執り行われた儀式の場であった

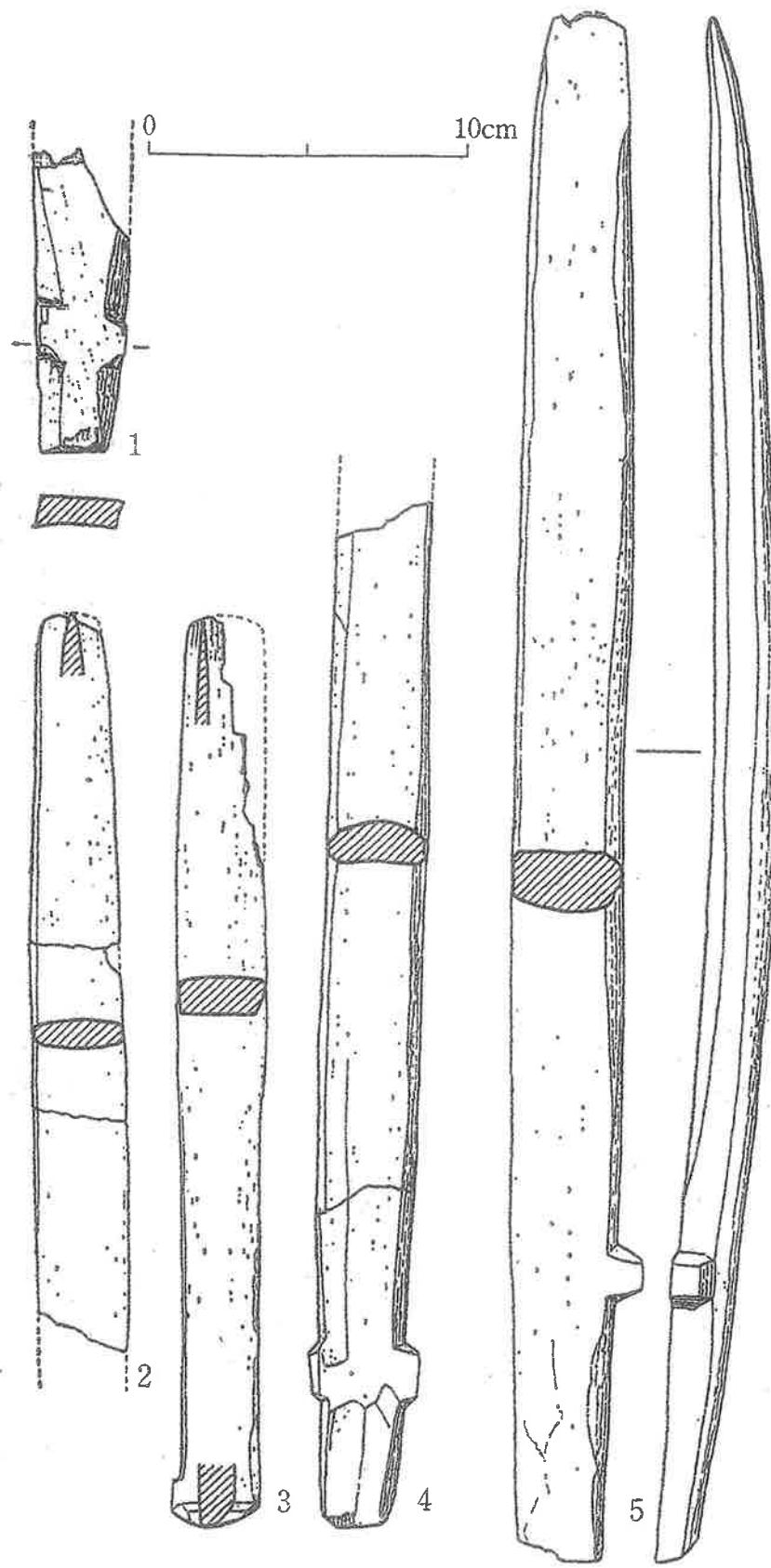


丹塗土器（井原塚廻遺跡）

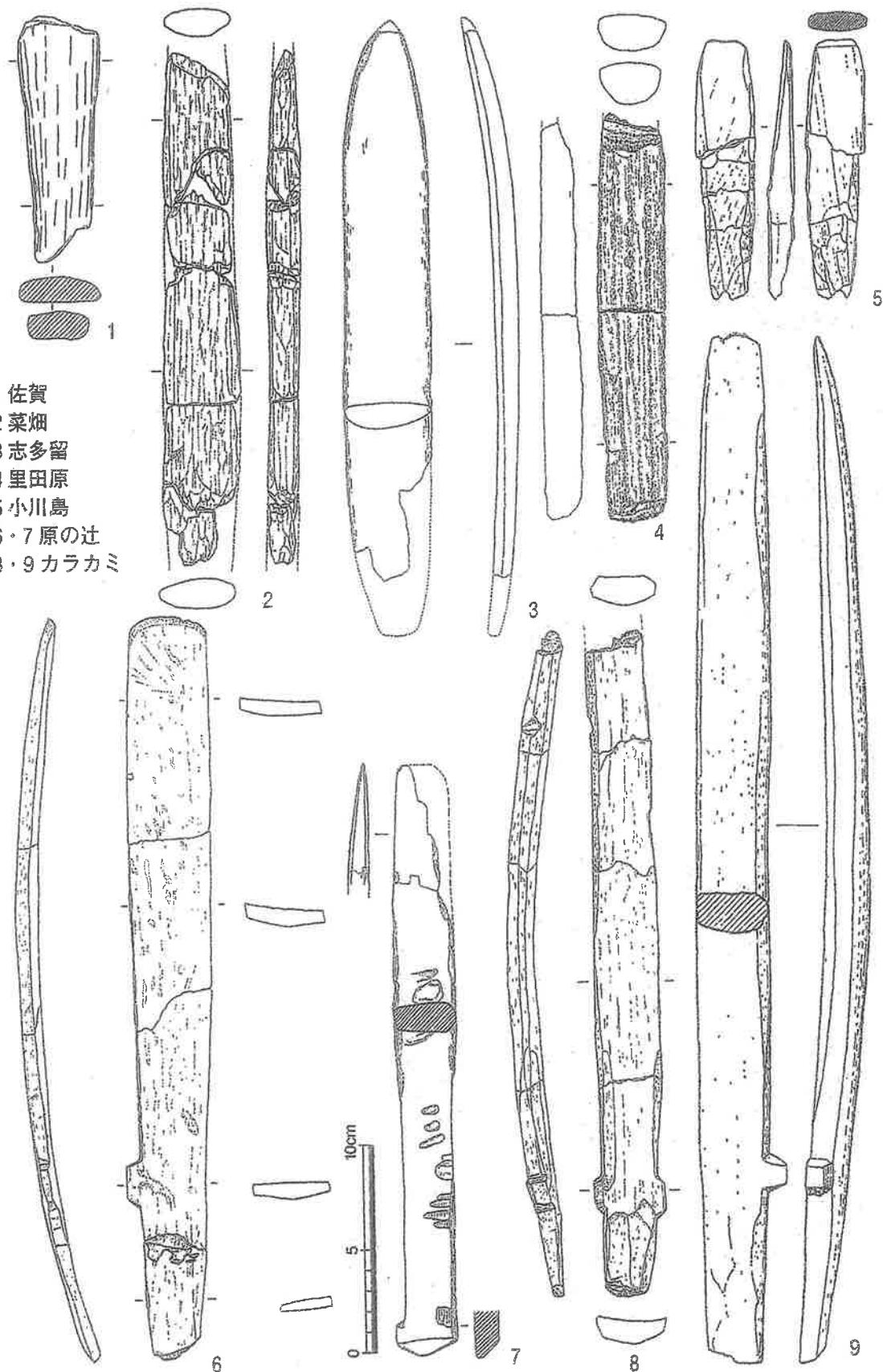
鮮やかな赤色に塗られた土器。祭りなどの特別な場面で使われた。



日韓アビビおこしの展開図試素

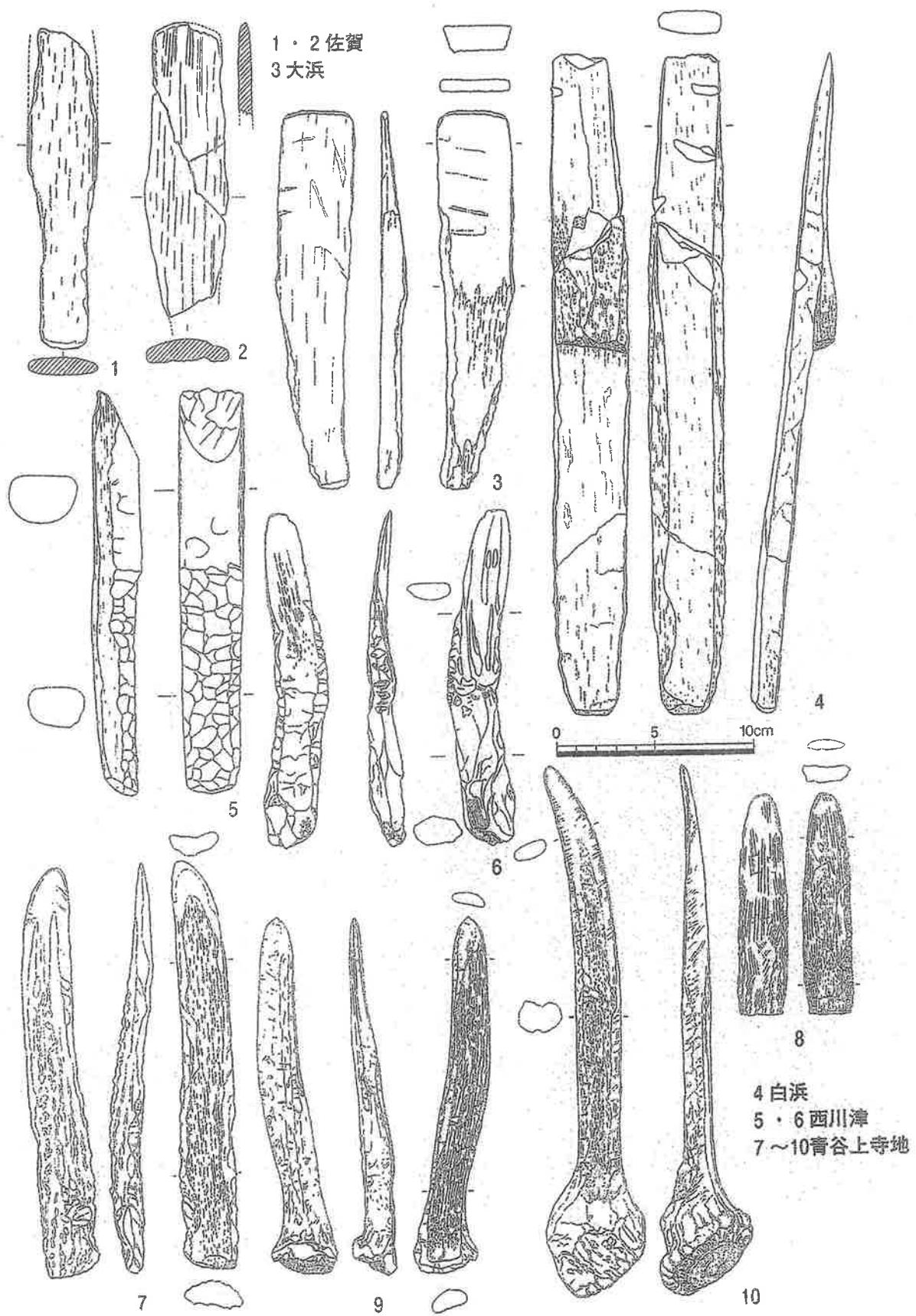


壹岐カラカミおよびハルノツジ出土のへら状鯨
骨製品

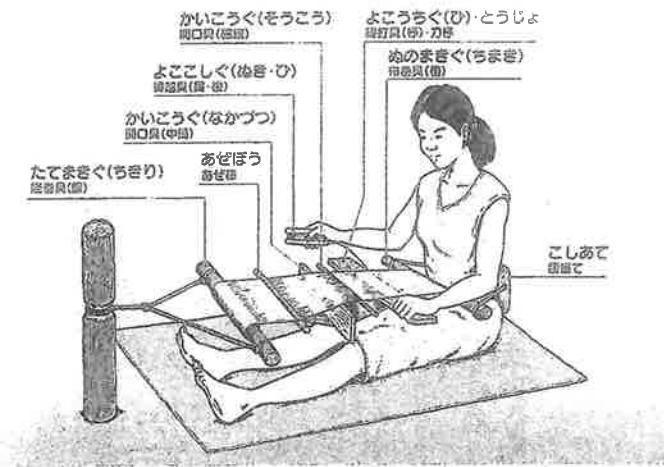


日本列島の①I類 (1~5) および①II類 (6~9) アワビおこし

武末純一, 2008 「韓國・朝鮮島遠古時代アワビおこし」
 『九州と東アジア考古学』—九州大学考古学研究室50周年記念論文集— 二巻
 九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会



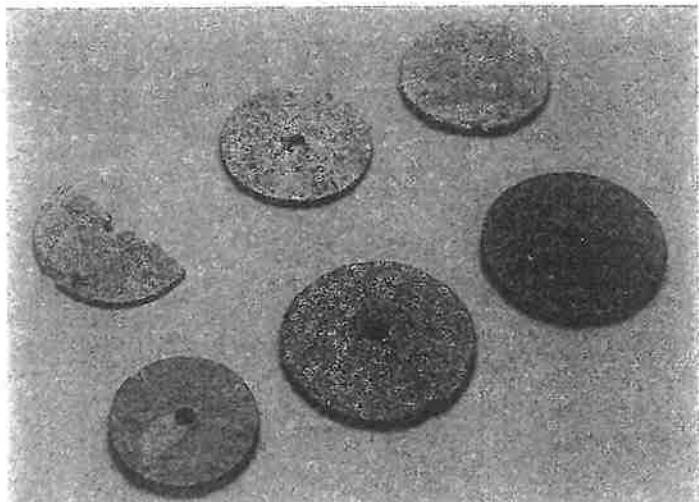
日本列島の①Ⅲ類(1・2), ①Ⅳ類(3~5), ②A類(6~8), ②B類(9・10) アワビおこし



機織りのようすと道具

(上／機織りのようすと道具の名称。下／出土した機織り具（上鎧子
遺跡、縫打具）)

弥生時代になると経糸に緯糸を通して布を織る技術が朝鮮半島から伝わった。機織り機の一方を杭や木などに、もう一方を自分の腰に固定し、ピンと張った状態で織る。



紡錘車と糸を紡ぐようす

(上／紡錘車 (三雲・井原遺跡)
下／糸を紡ぐようす)

適当な太さの強い糸をつくるため、織維に擦りをかけて糸を紡いだ。この作業を使う円盤状の重りが紡錘車。



製裘衣(男)

貢頭衣(女)

弥生人の服装

『魏志倭人伝』には倭人の男女の服装について「(男性は)幅広い布をただ結び束ねるだけで縫うことはない」「婦人は真ん中に穴を開けて頭を通して着るだけ」と記している。それぞれ製裘衣と貢頭衣にあたる。

『魏志倭人伝』には男女の衣装についての記録があり、それぞれ、製裘衣や貢頭衣を着ていたようを知ることができる。身分の高い人物は、貝紫や茜などの自然にある染料で糸を染め、色鮮やかな絹織物を纏っていたと考えられている。また、弥生人はさまざまなアクリセサリーも身に着けていた。なかでもガラスやヒスイ、水晶、碧玉などでつくられた勾玉や管玉などは貴重で、有力者のみが身に着けることができた。

衣一まとめ

弥生時代に入ると、稻作とともに機織りの技術が伝えられ、絹や麻、カラムシなど糸を紡ぎ、布が織られるようになつた。

絵画木板の特徴

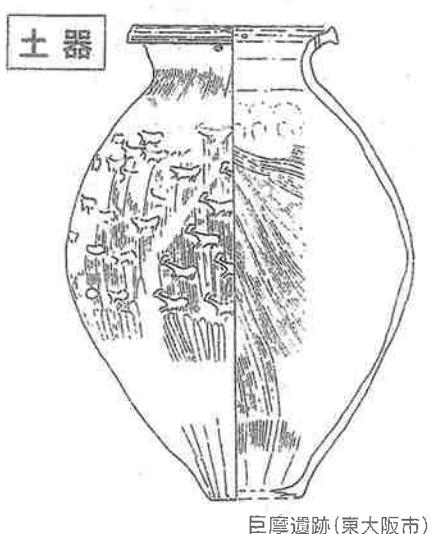
板に絵画を線刻する絵画資料が西日本各地で発見されている。本紙でも紹介している上罐子遺跡(前原市)をはじめ、青谷上寺地遺跡(青谷町)、姫原西遺跡(出雲市)、南方済生会遺跡(岡山市)、脇狭遺跡(豊岡市)、八日市地方遺跡(小松市)など広範囲の地域から出土しており、これらを総じて絵画木板と呼んでいる。

絵画木板は、琴、琴板などの楽器、板を木釘などで縫ぎ合させて作る箱型などの組物容器の部材が多いが、南方済生会遺跡では剣形木器の表面に線刻が施されているものもあり、儀器でそのものである場合もある。楽器、精製容器

なども当時の一般的な生活用具ではなく、まつりに用いられた特殊用品であったと考えられ、祭祀行為の後に意図的に割った痕跡を残すものもある。画題は鹿の他、人、水鳥などが多いが、日本海地域ではシュモクサメも描かれている。

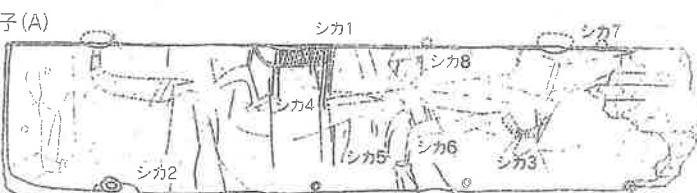
さて、上罐子遺跡から出土した動物を描いた木板絵画について詳細に観察すると、描かれた多くの画題の中で中心的な絵とそうでない絵があることに気づく。

線刻板Aでは鹿8頭、(水)鳥2羽が確認できたが、最も強調されているのが鹿1である。胴部の輪郭線は深くしっかりと刻み込まれ、内面は斜格子文で充填している。他の絵画は線の彫りが浅く肉眼では確認することが困難なほどであったり、線を結んでいるが何を描いたのか特定することができないものもある。また、絵と認識することができない傷状の細線が多く刻み込まれる。

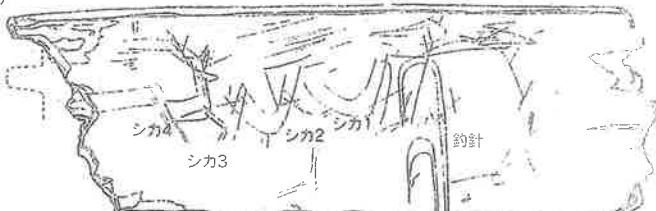


木板

上罐子(A)



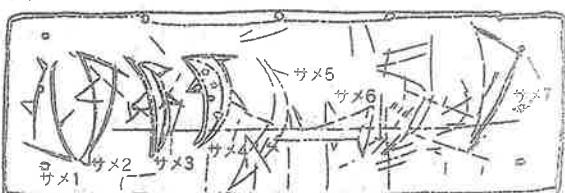
(B)



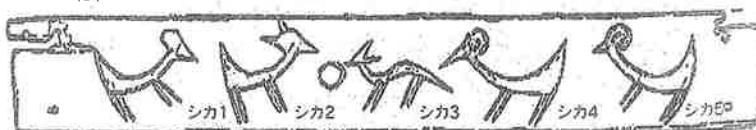
(C)



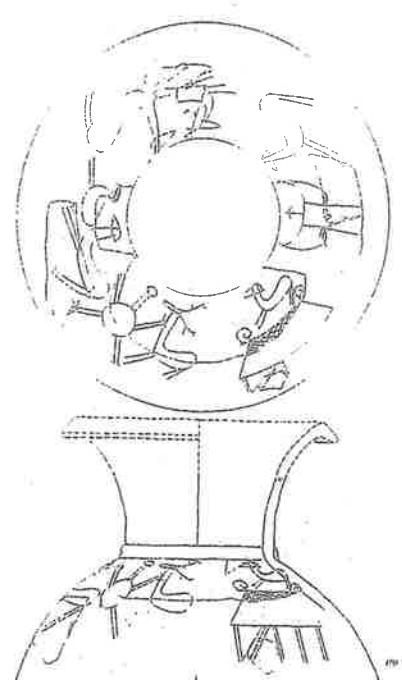
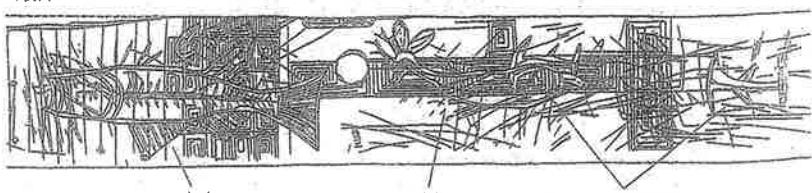
青谷上寺地(A)



(B)



脇狭



北部九州弥生時代中・後期の動物相

倭人伝が動物相について詳細を記していないとなれば、倭人伝の時期つまり弥生時代後期を中心に、その前後の時期の発掘調査によてもたらされる考古資料から、アプローチせざるをえない。そのことが、倭人伝に記載される動物相を補完し、また、倭人伝の記載の信憑性を検証することにもなるわけである。

そこで、考古資料といえば、動物そのもの遺存体、土器・銅鐸などの遺物に表現された絵画、そして、粘土もしくは木で製作された形象物などがある。まず、動物遺存体は、貝塚遺構から出土することが多い。末盧国故地に当たる佐賀県唐津市の雲透遺跡^{注2)}は、標高63mの上場台地上に立地し、北方眼下に玄界灘を見下ろすことができる。ここで、弥生時代中期前半の貝層が検出された。貝塚は、岩礁性の貝類を多量に含み、そしてヤスといった刺突具が多数出土した。このことは、前述の倭人伝の末盧国に関する記事を、弥生時代中期前半にさかのぼって裏づける。現在までに同定された動物遺存体は、哺乳動物4科4種、魚類5科6種、貝類18科30種、そのほか4科4種である。そのうち哺乳動物ではシカとイノシシが大部分を占め、タヌキやイルカ科の一種も認められる。シカ・イノシシともに大半が四肢骨の破碎されたものであり、また、鹿骨は切り取った痕跡が残るものが多い。このことから、鹿角については、食料よりもむしろ、漁労具の材料として意図的に持ち込まれたものといわれる。果して、漁労具としての釣針や刺突具に、それぞれ鹿骨・猪牙や鹿中手（足）骨を使用している。

魚類では、主としてマフグ・マダイ・マグロがあるが、マアジ・クロダイなども見られる。貝類は、トコブシ・ウミニナ・アカニシなどの小型巻貝が主体をなすが、アカガイ・マガキ・アサリ・ハマグリなどの二枚貝も含まれる。このような特徴は、雲透遺跡の西北方約8.6km地点に位置する小川島貝塚では、ウニ類・フジツボ類・カメノテが大量に見られ、アワビ類が少なくなかったこととは様相を異にする。

末盧国北方に位置する一支国の遺跡は、原の辻遺跡

とカラカミ遺跡に代表される。原の辻遺跡では、長崎県教育委員会が1993年から2003年までの間に行なった発掘調査で出土した、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての動物遺存体は^{注3)}、破片で2,258点にのぼる。そのうち、種や部位などが同定されたのは1,479点である。その内訳を見ると、哺乳類1,323点、魚類130点、貝類10点、両生類1点、爬虫類7点、鳥類8点となっている。

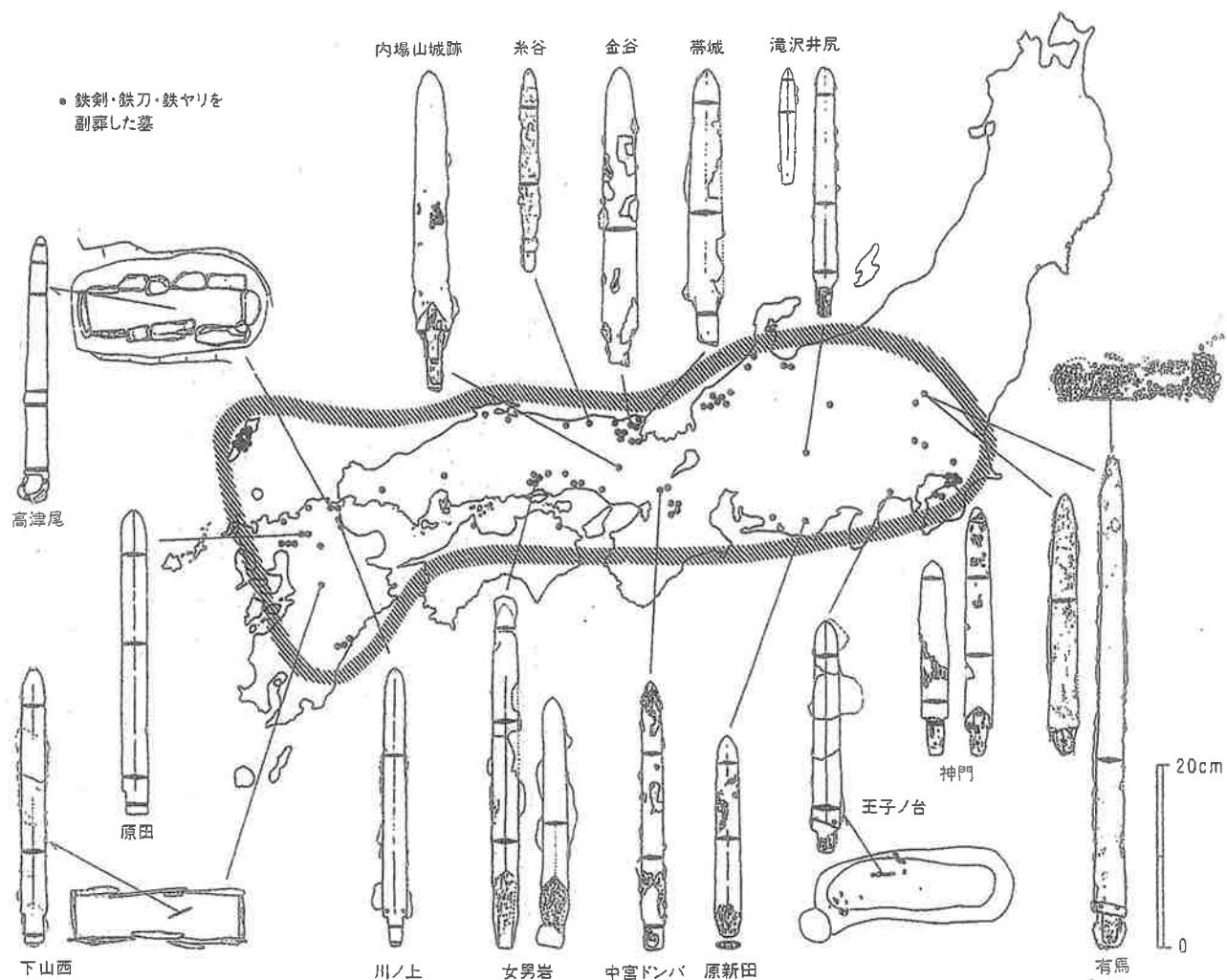
哺乳類では、イヌが最も多く、イノシシがそれに次いでいる。そのほか、タヌキ・ウマ・ウシ・ニホンジカ・アカシカ・ネズミ類や、イルカ・クジラ・アシカなどの海棲哺乳類が見られる。ここで、ニホンジカに代表されるシカ科は出土量が少ない。そして、シカ科の動物遺存体の部位は、鹿角や中手骨・中足骨に偏在し、また、加工痕を伴うものが多いことから、食料としてよりも骨角器の素材として使われたことが指摘されている。この点は、伊都国の大瀬戸頭給遺跡出土の古代のものではあるが、加工痕をもつ鹿角や、さきに見た雲透遺跡の場合と共通している。

魚類では、サメ類、メバルなどの仲間であるフサカサゴ科の一種、マダラ、コチ科の一種、マダイ、そのほかのタイ類、ヒラメなどがある。貝類には、ハマグリが多数出土しているほか、ザザエ・アワビ・マルタニシなどがあるが、魚貝類の出土量はそれほど多くないといわれる。ところが、1951（昭和26）年に東亜考古学会が行った発掘調査では^{注4)}、弥生時代後期前半に当たる上層から30種類ほどの貝殻が出土したが、アワビ・ザザエなどの巻貝を主とし、ハマグリ・アサリなどの二枚貝は皆無に近い程度であったといわれる。

原の辻遺跡出土の動物遺存体で注目されるのは、イヌが最も多く39%を占める。ちなみに、イノシシは35%、ニホンジカは4%の割合である。イヌの多くは環濠部2号溝の一角で、貝層を伴う食料残滓を集中的に投棄した散乱状態で出土している。そして、遺存体そのものの四肢骨では、鋭利な刃物による解体痕や、肉を剥ぎ落としたり、打ち割られたりした痕跡を残すものが少なからずあって、イヌが食用にされた可能性が高いとされる。

カラカミ遺跡は、1952（昭和27）年に東亜考古学会によって発掘が行われた。その際、弥生時代後期前半のころの哺乳動物では^{注6)}、シカ・イノシシ・イヌ・ウマのほか、海棲哺乳類のクジラ・シャチ・アシカ・イルカなどが出土している。また、貝類では^{注7)}、カキ・アワビ・ザザエ・オキシジミ・イガイなどが知られる。その後、1982（昭和57）年から84年にかけて、勝本町教育委員会がカラカミ遺跡の範囲確認調査を行なった。その時も、シカ・イノシシ・クジラ・イルカなどが検出された。

つぎに、前述のとおり、倭人伝には牛や馬がないと記述する。ところが、原の辻遺跡では、1996年度の調査時にウシとウマの骨が出土している。ウシの骨の出土は早く1954年以前から知られるが、同じように、カラカミ遺跡でも採集されている。馬韓伝では、牛・馬に乗ることを知らず、すべて副葬品に当てられてしまうと見える。しかし、馬韓の故地に当たる新昌洞遺跡では車衡と車輪が出土しているので、牛もしくは馬に引かせた可能性がある。それに対し、弁辰伝では牛や馬に乗ったり車を引かせたりすると記す。一支国の牛や馬は果してどんな役割を果たしたのであつたろうか。



弥生時代終りころの武器と戦いのひろがり

国立歴史民俗博物館、1996～97『倭國をしる』朝日新聞社

銅鏃の形態分類

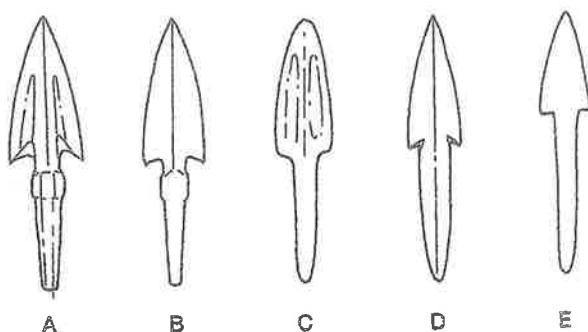
A類・・・原の辻を代表する中期後葉の
銅鏃

B類・・・A類からやや退化傾向をみせ,
範被の造りが雑でやや扁平と
なる。

C類・・・逆刺の造りが弱く, 範被が消
滅する。権が特徴である。

D類・・・断面三角形を呈し, 逆刺は短
いが鋭い。逆刺は, 茎の側面
から削り出す。

E類・・・茎が刃部よりも長くなる。造
りも概ね雑となる。



第94図 銅鏃形態分類

鉄の武器

鉄製武器の登場

鉄製の武器には、剣、矛、戈、矢じりのほかに、刀が加わります。

日本列島における鉄器の出現は、およそ2400～2300年前の弥生時代初頭に遡ります。福岡県今川遺跡から出土した矢じりも、これら初期の鉄器の中に加えてよいものでしょう。ただ、この矢じりは、その後の鉄製武器の展開にはつながりません。弥生時代における鉄製武器の本格的な展開は、2100～2000年前、弥生時代中期の中ごろからのことでした。

鉄劍の出現と展開

接近戦用の武器である剣、刀、矛、戈のうち、弥生時代を通じて最も数多く、また最も広い地域で用いられていたのは剣でした。弥生時代の鉄劍は現在、その出土数が150例を越えており、九州から関東地方までのきわめて広い地域から見つかっています。これに対して、刀、戈、矛は、いずれも十数～数十例程度で、北部九州に分布が集中しています。

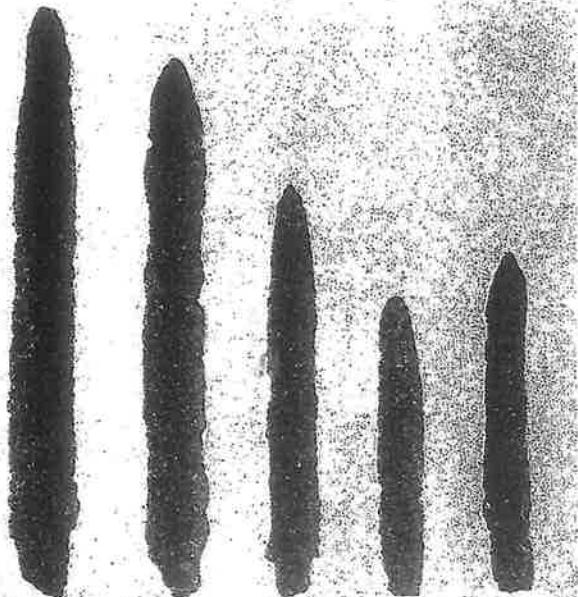
鉄劍は、2400年前ころ、中国大陆の春秋・戦国時代末期に使われはじめ、前漢が成立する2200年前ころまでに、長さ1m前後の長い剣が盛んに作られるようになりました。このころの鉄劍は、中国式銅劍の影響からか、柄に差し込む茎の部分が非常に長いことが特徴です。やがて2100年前、朝鮮半島に樂浪郡が置かれると、朝鮮半島にも中国大陆系の長剣が流入します。そしてほどなく、茎が短く、剣身の長さ30～60cm程度の朝鮮半島特有の鉄劍が誕生したのです。

弥生時代の鉄劍には、この朝鮮半島の鉄劍と区別がつかないものがたくさんあります。また、なかには中国製のものに似た茎の長いものも見られます。いずれにしても、鉄劍出現以前から使われていた銅劍の影響は全く見られず、鉄劍の多くは朝鮮半島製、一部は中国製であったと考えられています。

ただし、日本列島製の鉄劍が無かったわけではありません。弥生時代後期になると、朝鮮半島や中国では例のない、長さ20cm以下の短い鉄劍が数多く見られるようになります。短い鉄劍が作られる背景に、鉄素材の不足を想定する説もありますが、一方で、これらの短剣が、弥生時代中期の石劍に長さが似ていることからすれば、石器が消滅する時に石劍に合わせた長さの鉄劍が作られた、と考えることもできるでしょう。

鉄刀・鉄矛・鉄戈

鉄刀、鉄矛も、ほとんどが朝鮮半島・中国製と考えられています。同じころの中国大陆で、鉄刀が実戦用の武器として発達し、鉄劍にとってかわっているにもかかわらず、弥生時代に鉄刀が武器として発達しなかった点は興味深い現象と言えるでしょう。弥生時代の人々にとっては、剣で戦うことこそが意味のある行為だったのかもしれません。



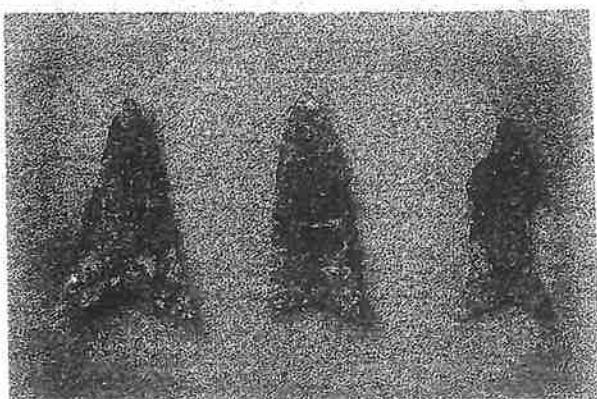
鉄劍(左長さ31.4cm)/群馬県有馬遺跡



鉄矛(長さ22.6cm)/福岡県道場山遺跡

鉄鎌の出現

上記の鉄製武器類が、力の象徴としての意味を強く持ち合わせているのに対し、鉄鎌は当初から、石鎌以上の攻撃力をめざした純粹な武器として出現しました。



鉄鎌(左長さ3.2cm)/福岡県吉ヶ浦遺跡

身を守るための武器

防禦のための武器

これまで紹介してきた武器は、全て人を殺傷することを目的とした攻撃用の武器でした。しかし、攻撃用の武器が発達すれば、その武器の威力を軽減し身を守る、いわば防禦のための武器が出現することは当然のなりゆきと言えるでしょう。弥生時代には、防禦用の武器として、木製の楯と鎧がありました。

置いて使った楯

大阪府鬼虎川遺跡から出土した楯は、弥生時代の楯の高さがわかる貴重な例です。弥生時代の楯は、なぜか細かく割れて出土することが多く、全体の大きさがわかる例は限られています。この楯も縦方向に割れていますが、運良く楯の上下が残っていたのです。

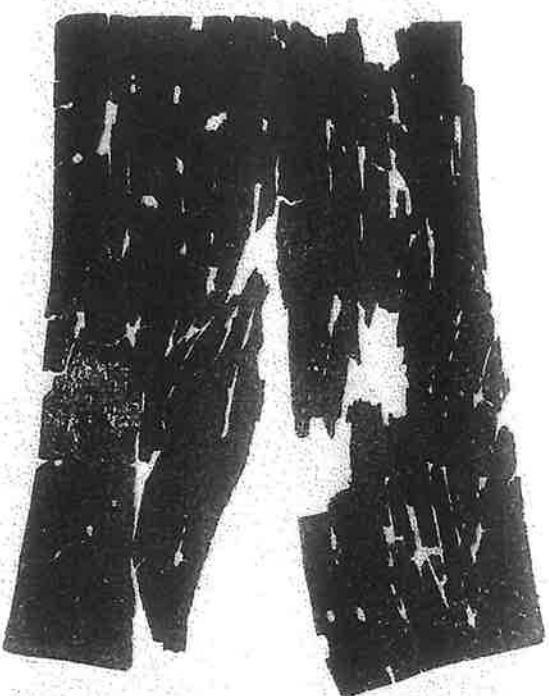
楯の高さは133cm。かがめば大人の男性でも十分隠れられる大きさです。中央に残る取っ手のあとから推定して、幅は30cm前後。この大きさから、とても武器を片手に、手にもって使った楯とは考えられません。地面に置いて、飛んでくる矢から身を守る置き楯だと考えられます。この楯が作られたのは、今からおよそ2150年前の弥生時代中期のはじめころ。弥生時代の楯としては最も古い部類に属します。

手に持つて使った楯

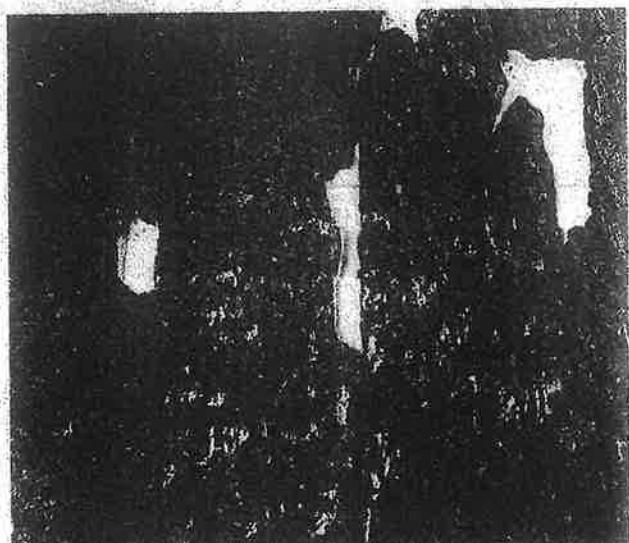
しかし、この例をもって、弥生時代の楯が全て置き楯だったと断言することはできません。奈良県の保津宮古遺跡から出土した1700年前の楯は、完全な形が残った珍しい例ですが、この楯は高さ98cm・幅65cmと、鬼虎川遺跡のものに比べかなり高さが低くなっています。また、愛知県朝日遺跡から出土した、楯の表面に貼ったと思われる木の皮も、高さ78cm・幅60cmと似たような大きさです。これらの楯は置き楯とするには、やや高さが低く、持ち楯と考えるのが妥当でしょう。佐賀県川寄吉原遺跡の銅鐸形の土製品や大阪府平野遺跡の絵画土器には、それぞれ左手に楯を持つ人物が描かれていますが、それらは明らかに持ち楯なのです。特に川寄吉原遺跡の例では、右手に戈と思しき武器を持っており、接近戦用の武器とセットになった持ち楯があったことを想像させます。

飾られる楯

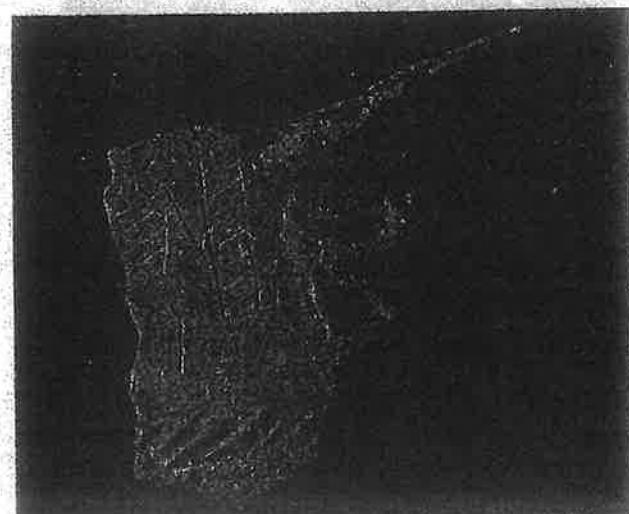
弥生時代の楯には、置き楯、持ち楯いずれであっても、表面に装飾を持つものが多い点に大きな特徴があります。鬼虎川遺跡の楯は、表面が真っ赤に塗られており、へりの部分は木の皮や羽などで飾られていたと考えられています。また愛知県朝日遺跡で見つかった楯の破片には、赤と黒で三角の模様が描かれ、木の皮の紐で装飾されていました。楯に込められた呪力で敵を威嚇し、攻撃を防ごうとしたのでしょうか。また、儀礼や祭りで楯が使われていたことも考えなければならないでしょう。



楯(高さ98.0cm)／奈良県保津宮古遺跡



楯にあけられた小さな穴／奈良県保津宮古遺跡



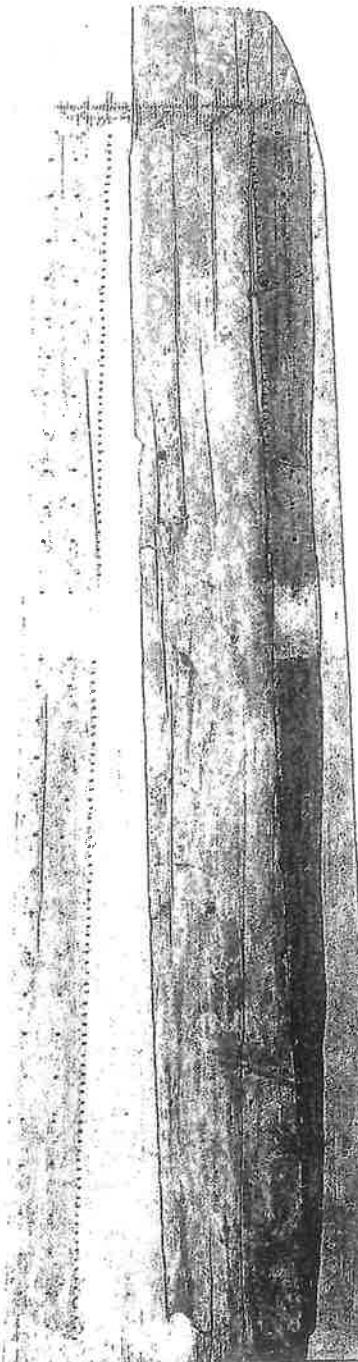
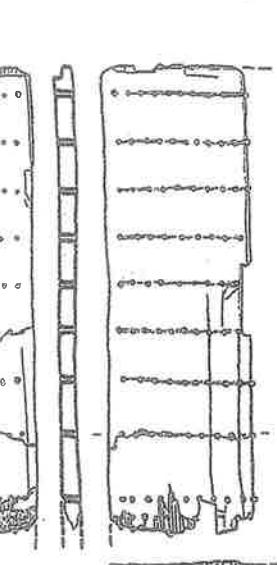
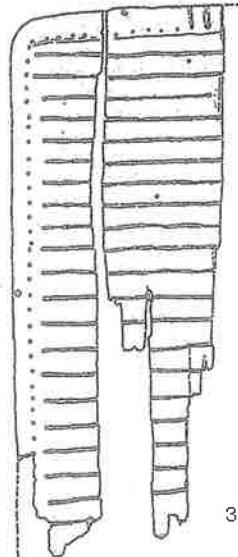
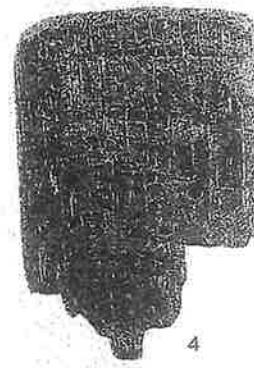
楯を持った人物の描かれた土器(高さ約11cm)／大阪府平野遺跡

6 5 4 3 2 1
 野遺跡 前一世紀 弥生 II～IV期
 木の盾 大阪府東大阪市鬼虎川遺跡 前二世紀 弥生 II期
 木の盾 大阪府八尾市龜井遺跡 二、三世紀 弥生 V期
 木の盾 長崎県石田町原の辻遺跡 前二、三世紀 弥生 I
 木の盾 大阪府東大阪市西岩田遺跡 二世紀 弥生 V期
 木のよろい 静岡県浜松市伊場遺跡(復原複製) 二世紀 弥生 V期

最近、石の矢尻の先が折れて木の盾に刺さつた状態のものが岡山市南方遺跡でみつかった

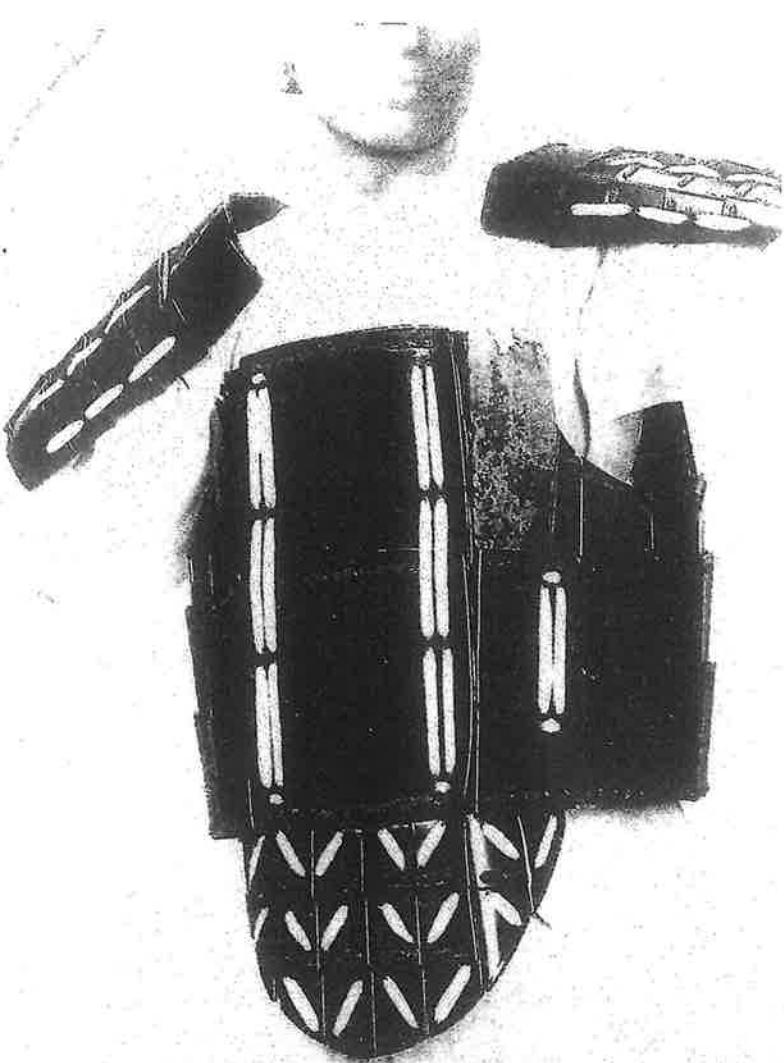


11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 木のよろい 長崎県原の辻遺跡 前一世紀 弥生 III期
 木のよろい 長崎県原の辻遺跡 前一～二世紀
 木のよろい 大阪府堺市下田遺跡 三世紀 古墳前期
 木のよろい 岡山市南方遺跡(復原複製) 前一世紀 弥生 V期
 木のよろい 福岡市曾居遺跡(復原複製) 二世紀 弥生 V期

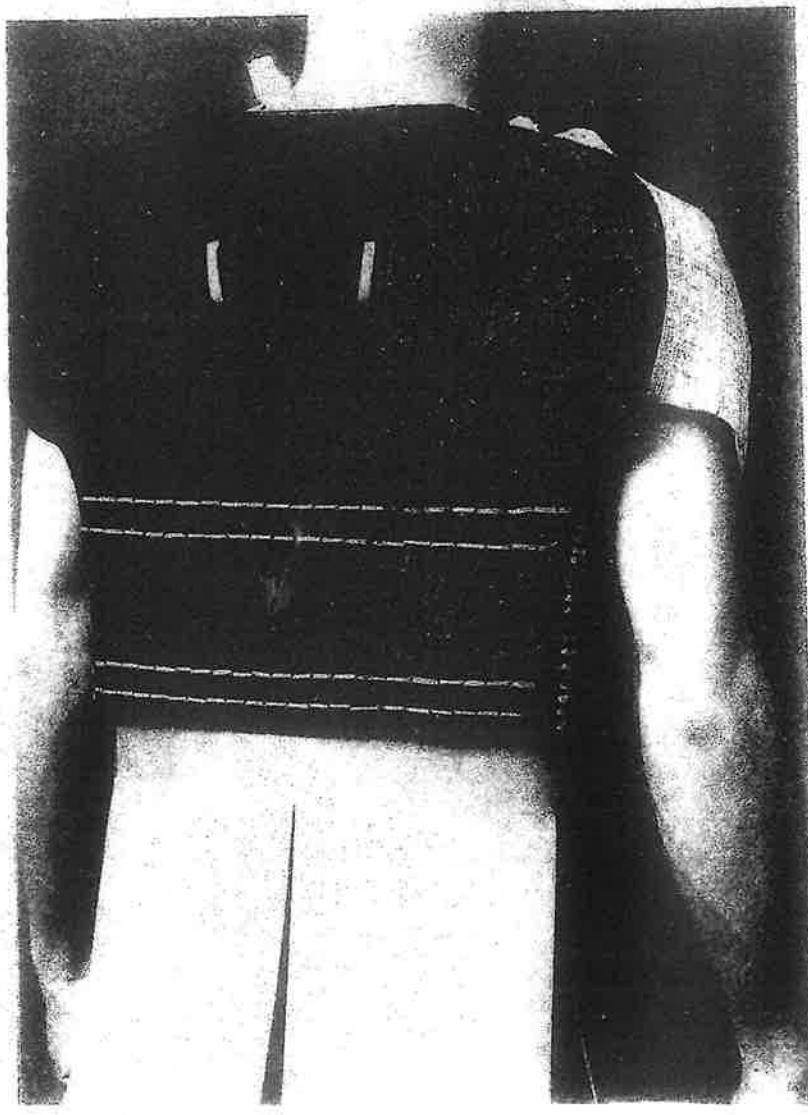


6

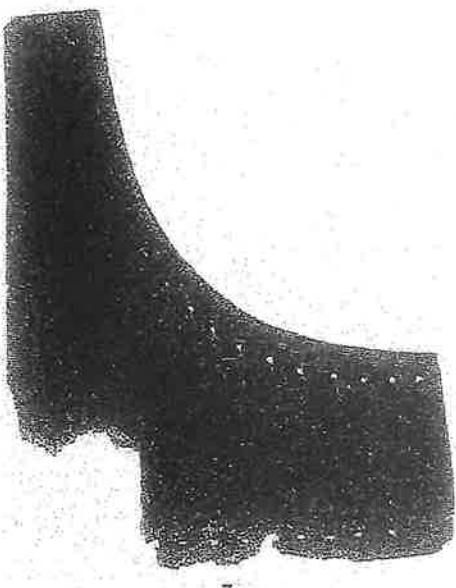
5



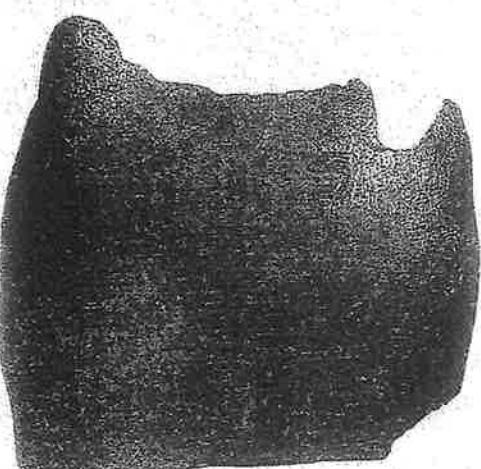
10



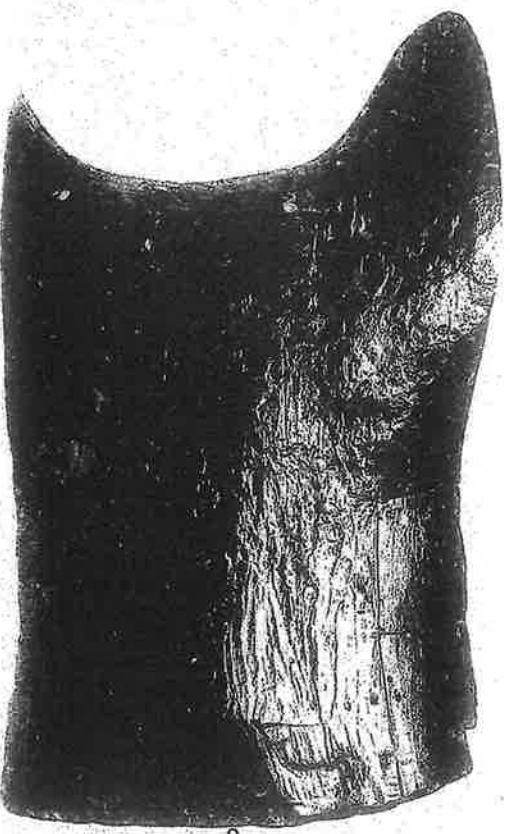
11 24



7



8



9

古墳の誕生

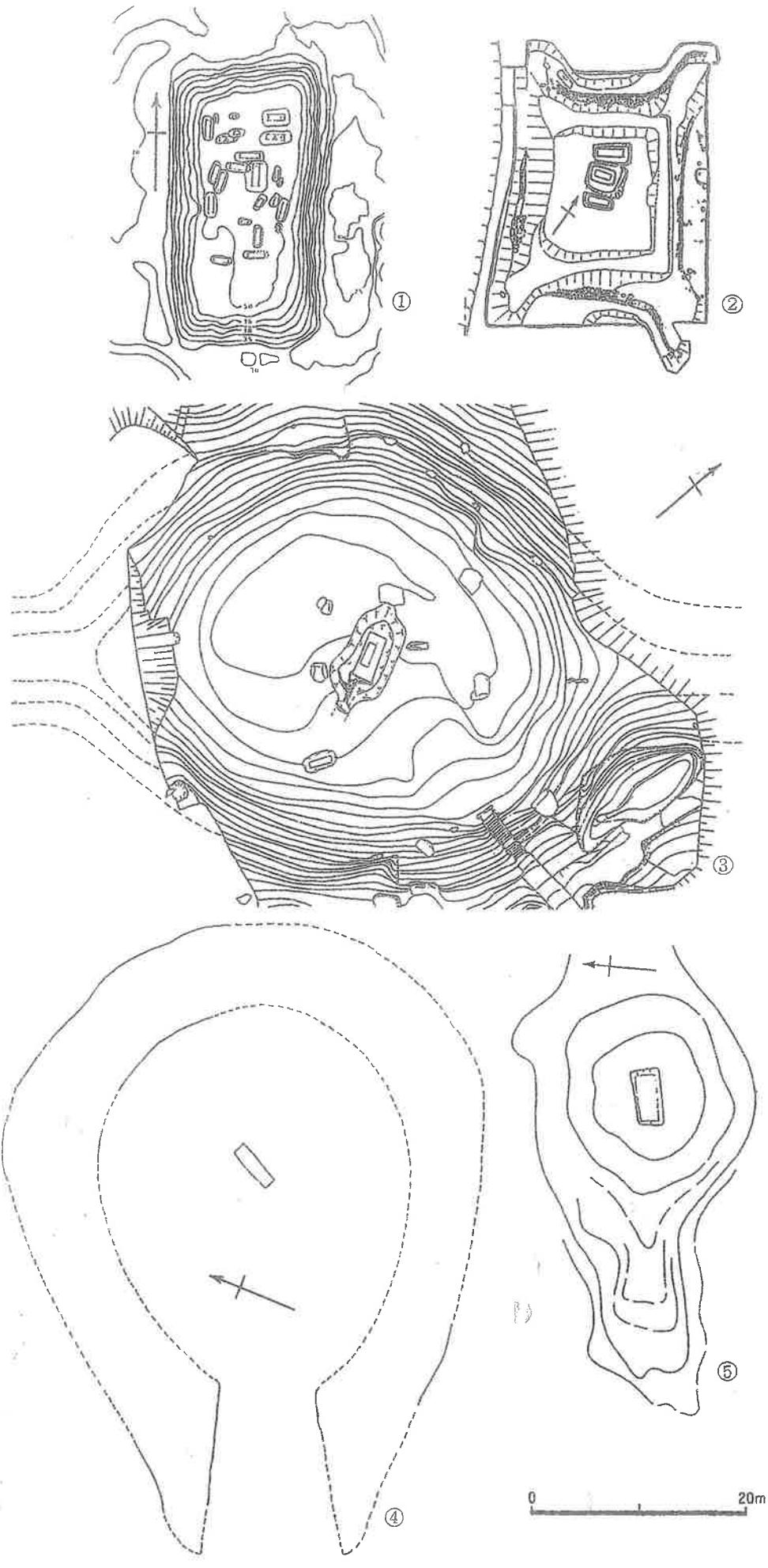
動態を描くことは不可欠だ。

鍵穴形の平面形をもつ前方後円墳、このユニークな

前方後円墳の起源を弥生墓に探る

古墳時代は、前方後円墳の時代ともよばれる。この

時代を語る上で、前方後円墳の誕生から消滅にいたる



弥生時代の墳丘墓

- ① 大阪府加美遺跡 一世紀
- ② 島根県仲仙寺山一二号墓 二世紀
- ③ 岡山県橋築墓 二世紀
- ④ 千葉県神門四号墓 三世紀中葉
- ⑤ 岡山県宮山墓 三世紀後葉

齋出比呂志, 1989「古墳の誕生と終焉」『古代史復元』6, 講談社

楯築を掘る

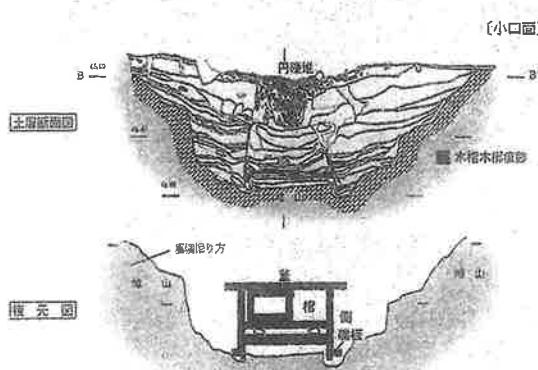
楯築墳丘墓の発掘調査

楯築墳丘墓は、岡山大学考古学研究室の近藤義郎教授を中心とし、一九七六年から七次にわたつて調査が行われた。得られた成果は、弥生時代の墓制のみならず、古墳時代に連なる墓上のマツリや、前方後円墳の成立を考える上で欠かすことのできない貴重なデータとなつてゐる。

楯築墳丘墓の発掘において特筆すべきは、円丘中央で確認された埋葬施設（中心主体）の構造である。精緻な調査によつて、土中で腐朽し、失われた木槨と木棺の痕跡が見出された。想定復元された中心主体の構造からは、楯築墳丘墓がその墳丘規模だけでなく、埋葬施設においても特別なものであつたことが明らかになつた（104・105）。

復元された木槨は、二重の床構造を持つて木槨を厳重に囲んでゐる。木槨の南側には石組みの排水施設が南方に延びており、遺体を地下水や湿気から守つっていた。木槨の内部からは三二kg以上の大量の水銀朱がみつかつてゐる。朱は血を意識させ、生命のエネルギーを感じさせるものであり、亡き王の復活、もしくはその偉大な靈力の保持を意図したのだろうか。

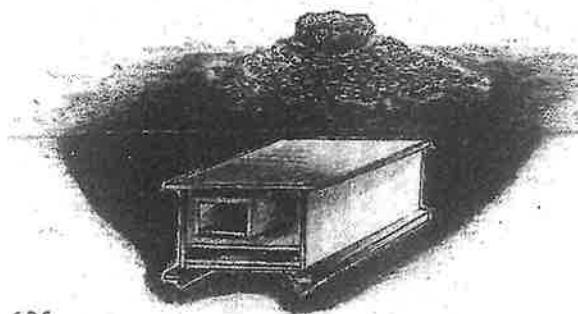
埋葬に際しては、様々なマツリが行われてゐる。木槨の直上には、こぶし大の円礫が大量に集積されてゐた。



105



104



106

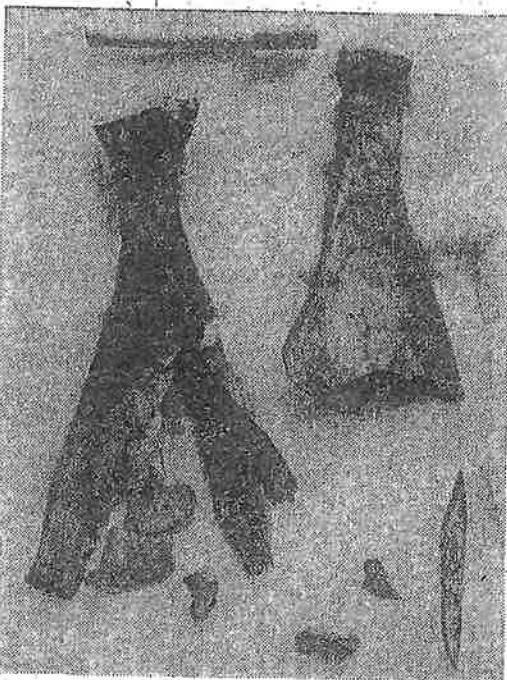
- 102 発掘風景
103 円礫堆から出土した脚付直口壺
104 中心主体部の上の円礫堆
105 中心主体部の断面図と復元構造
106 中心主体部埋葬 想像復元イラスト

吉岐の遺跡から 占い用シカの骨

日本で初の発掘 九大調査団

九大調查團

1977.7.26
(朝日文)



できない（九州大学医学部解剖学教室）

(国長)、同様の問題が、三世紀初頭の「魏、晉、唐」の時代、古に使われたシカの骨を掘り出した。同様には「其の終」事等（翁（おきなわ））こと「晋朝」、後漢（あくご）の「劉備（りゅうび）」、「曹操（さかえ）」、「袁紹（げんこう）」等の歴史家が、先づトアリ所を告ぐ。其の結果を得（じゆくえ）て、中国の盤（ばん）の辺の如く、火葬（ひなまし）（ひなまし）を施（ほどこ）め、火葬場（ひなましやう）と記（き）されるが、前述の諸廟（しよびょう）等に於ては、中國が火葬（ひなまし）された動物の骨を埋（うずく）めの接觸（せつぶつ）が國の行跡（ぎょうせき）、生前の靈廟（れいびょう）は大會（だいわい）の祭壇（さいだん）といふ。

「倭人伝」を裏付け

窓口での発見に意義
伊藤道治・神戸大教授(中国文
代史・田村学の疑惑)の話、トム
(海老川)の脇坂は中國と日本
の間では歴史家のべしがあり、そ
の技術が初めて日本に傳入した
跡を尋ねて、中國ではすでにと
えていた。それにもかかわらず

占いの方針が中間と全く同じで、それをたどりたといふ眞似様だ。これは、劇場半島を経由したためと考へられる。大陸文化移入の窓口で、異文化を発見したことの恩恵は大く、戦後も含めた出生兩帝代の新しい文化背景へのあり方を考えても、興味深いものだと思う。

壱岐島出土ト骨一覧表

項目 番号	遺跡名	出土区層	使用動物	使用部位	残存焼灼痕	保存状態	整治
1	唐神	6 T - 黒色	シカ	肩甲骨(r.)	12		ナシ
2	〃	7 T - 1	〃	〃(l.)		肩甲下窓欠	〃
3	〃	7 T - 5	イノシシ	〃(r.)	?	尾側1/2欠	〃
4	〃	7 T - 6	〃	〃(l.)	6	〃	〃
5	〃	東亜考古学会1952	シカ	〃(l.)	6	前縁破片	〃
6	〃	松永氏	〃	〃(r.)	3	〃	〃
7	原の辻	東亜考古学会1951	〃	〃(l.)	1	尾側2/3欠	〃
8	〃	〃	〃	〃(l.)	1	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃(r.)	6	尾側1/2欠	〃
10	〃	〃	〃	〃(l.)	3	前縁欠	アリ
11	〃	〃	〃	〃(r.)	2	尾側1/2欠	〃
12	〃	〃	〃	〃(r.)	2	後縁のみ残	〃
13	〃	〃	〃	〃(l.)	ナシ	尾側1/2欠	〃
14	〃	〃	イノシシ	〃(l.)	ナシ	〃	〃
15	〃	〃	〃	〃(l.)	1		ナシ
16	唐神	W-15 上層	〃	〃(l.)	3	尾側1/4欠	〃
17	原の辻	9C-7号住居跡	〃	〃(r.)	10	ほぼ完形	アリ
18	〃	〃	〃	〃(r.)	6	尾側一部欠	ナシ
19	〃	〃	〃?	〃(r.)	3?	前後縁棘残	アリ
20	〃	〃	〃	〃(r.)	不明	不明	
21	〃	〃	シカ	〃(l.)?	不明	尾側4/5欠	
22	〃	〃	イノシシ?	〃(r.)	不明	尾側3/4残	アリ

1～4 九大発掘分（1977年） 5～15 東亜考古学会（1951・1952年）他発掘分

16 勝本町教育委員会（1985年） 17～22 芦辺町教育委員会（1995年）

木村幾多郎「長崎県壱岐島出土のト骨」『考古学雑誌』第64巻 第4号より転載、一部加筆

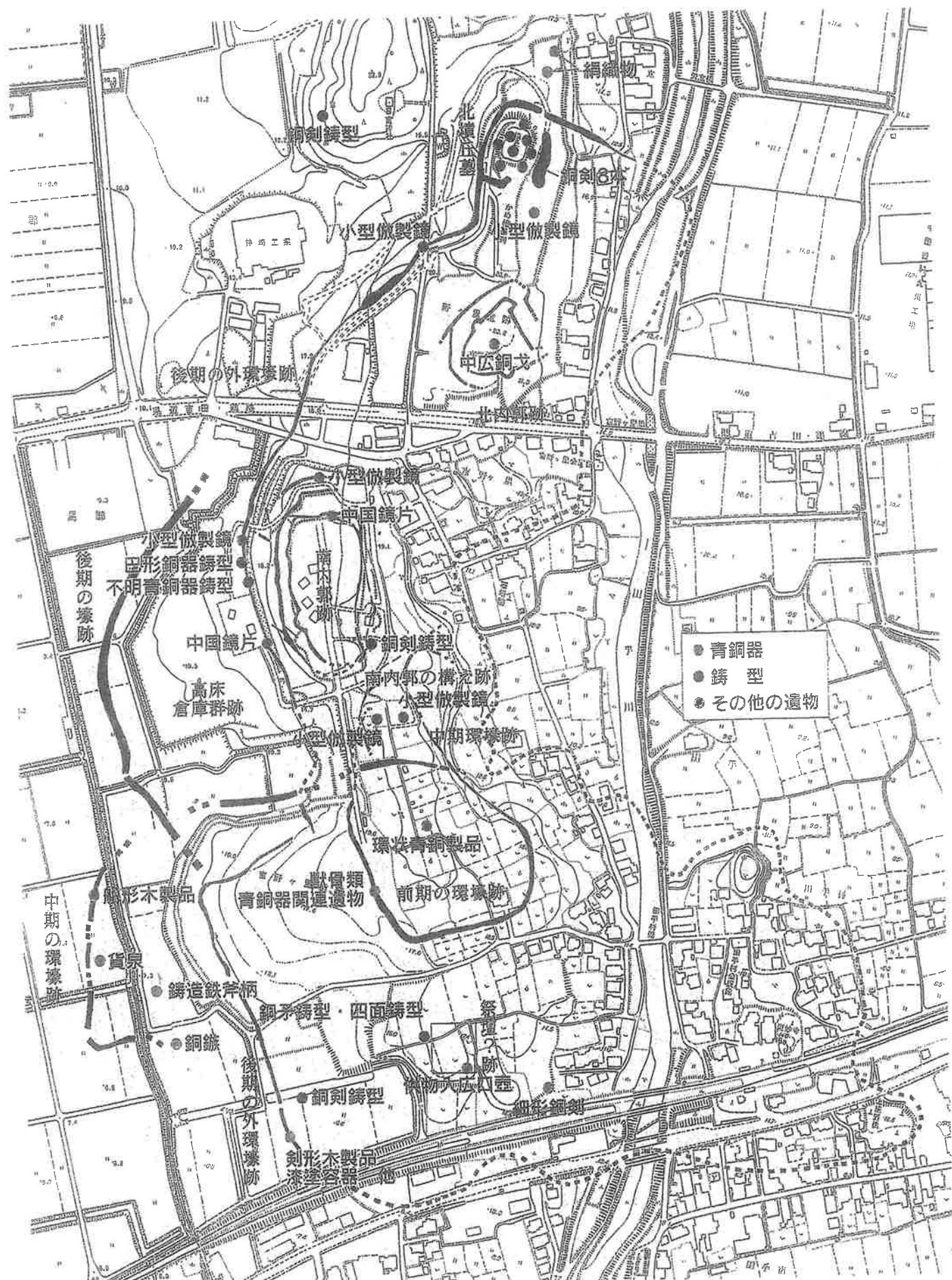
獸骨を焼き、骨の表面にできる亀裂によって吉凶を占うト占骨は中国の東北地方から朝鮮半島を経てもたらされたものであり、弥生時代の日本ではシカやイノシシなどの骨を焼いて生じたヒビ割れ。色調の変化を見て吉凶を占う風習があったことが『魏志倭人伝』や『後漢書東夷伝』に記されている。

倭人伝には「其の俗拳事往来に、云為する所有れば、輒ち骨を灼きてトし、もって吉凶を占い、先ずトする所を告ぐ。其の辞は令亀の法の如く、火折を見て凶を占う」とあり、ト占の内容がト骨と亀トがあったことが窺え、帯方郡は亀ト、倭人は骨トであったと解釈されている。

いまのところ、朝鮮半島から日本に受容されたことは間違いないところであるし、半島南岸に位置する全羅南道海南郡の郡谷里貝塚や泗川市勒島遺跡の近年の調査からは、多量のト骨が出土している。日本では最も近い位置にある対馬島からは発見されていないが、壱岐島では出土している。出土遺跡の多くは近畿・東海・関東地方に及び、特に神奈川県三浦半島の海蝕洞窟遺跡に集中している。

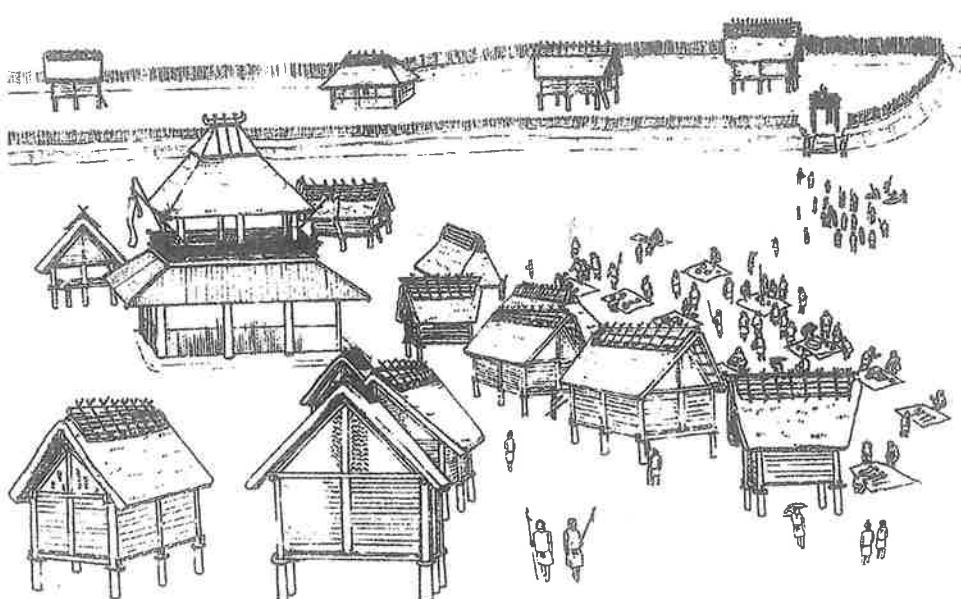
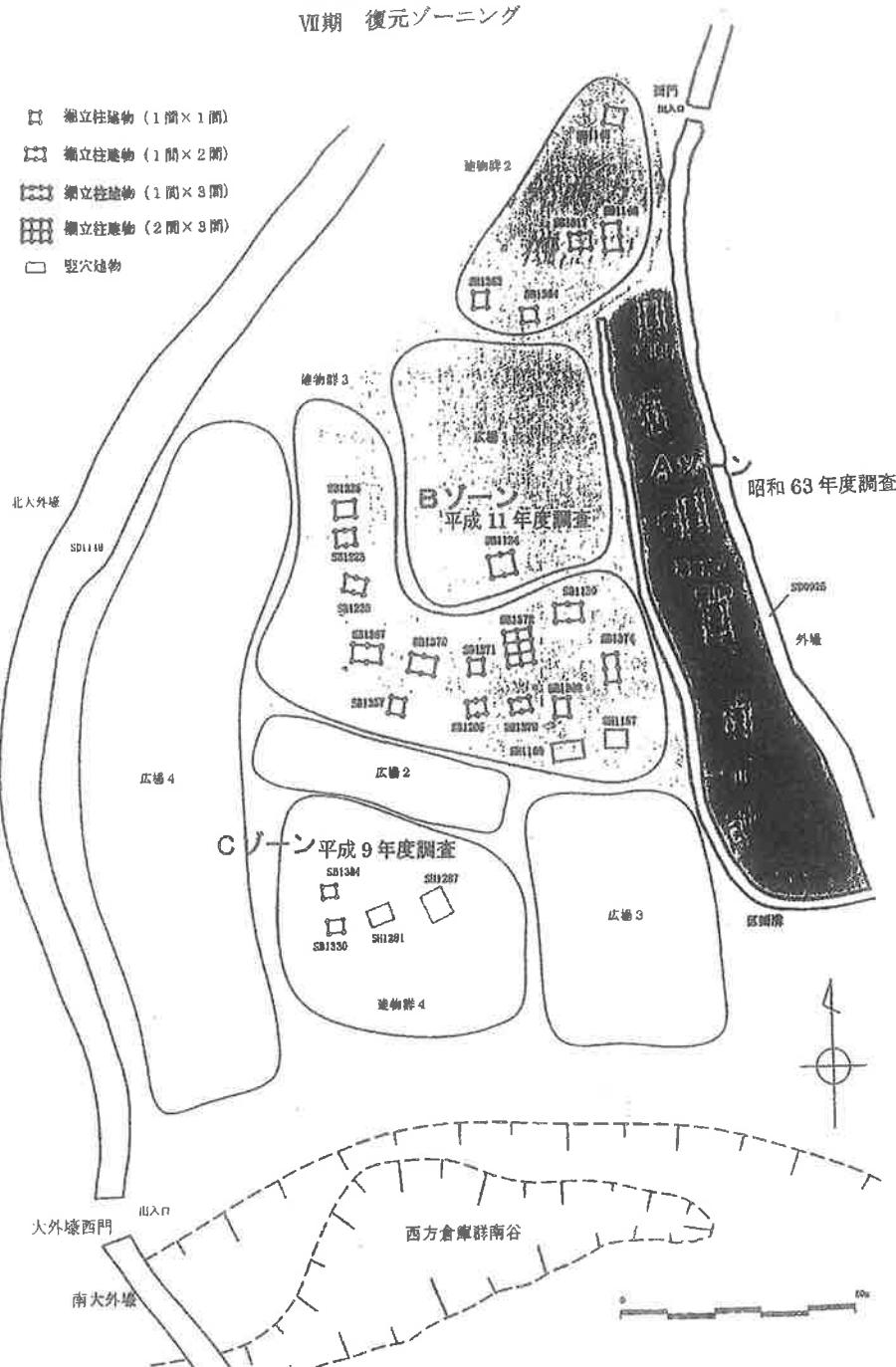
しかし、鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡からは227点のト骨が出土し、これまでの全国の遺跡の総出土数を一遺跡で上回っている。

長崎県教育委員会、2005年原の辻遺跡 総集編 I



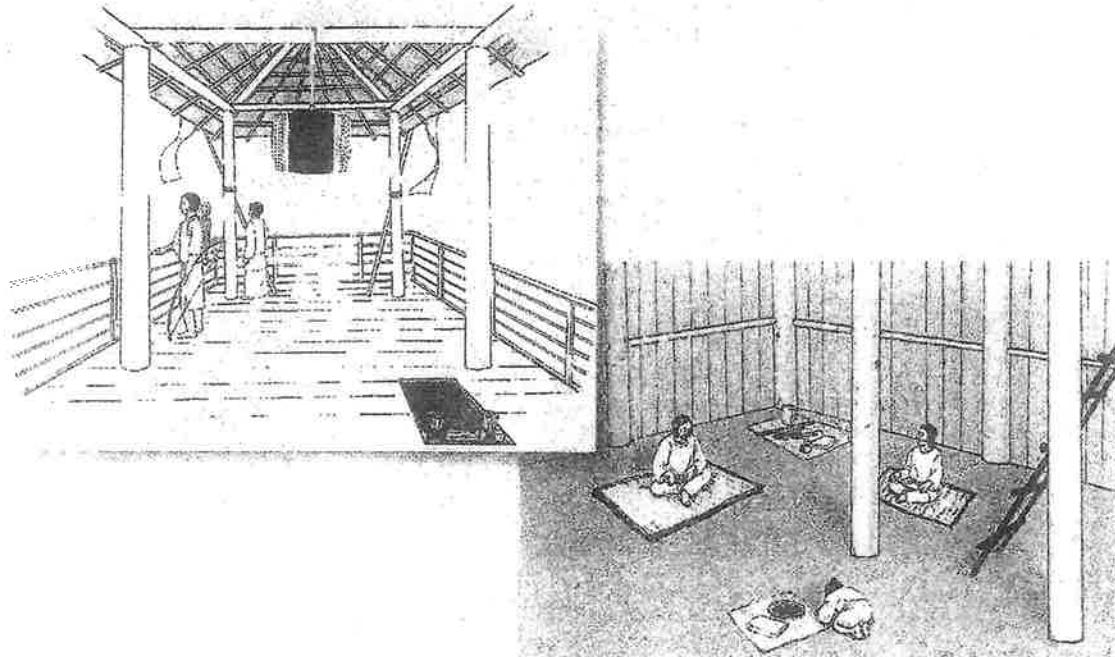
吉野ヶ里遺跡から発見された主な弥生時代の出土品

吉野ヶ里遺跡 南内郭西方倉庫群
VII期 復元ゾーニング



市 樓

市樓は、ここで開催される市を管理する建物です。下の階で市に参加する許可をもらいます。上の階には市の開催を知らせる旗と太鼓が置いてあり、兵士が見張っています。



市 の 倉

市で交換するために吉野ヶ里で製作された道具類を収めています。

